

人間 文化

Vol. 5
2007

特集

人間文化研究機構 第5回公開講演会・シンポジウム

人は、どんな手紙を書いたか ——近代日本とコミュニケーション

基調講演

候文の優勢と言文一致体の台頭 十川信介

手紙の時代 谷川恵一

漢文で綴られた日本の“手紙” ロバート・キャンベル

政治家の手紙——平田国学者を糸口として 宮地正人

マッカーサーへの手紙 安田常雄

パネル・ディスカッション

十川信介／ロバート・キャンベル／宮地正人／安田常雄／谷川恵一(司会)

大学共同利用機関法人

人間 文化 Vol. 5

特集

人間文化研究機構 第5回公開講演会・シンポジウム

人は、どんな手紙を書いたか ——近代日本とコミュニケーション

日時:2006年9月30日(土)

場所:一橋記念講堂(学術総合センター内)

目次

あいさつ

石井米雄 ————— 1

司会あいさつ 五味文彦 ————— 2

基調講演

候文の優勢と言文一致体の台頭 十川信介 ————— 4

手紙の時代 谷川恵一 ————— 12

漢文で綴られた日本の“手紙” ロバート・キャンベル ————— 23

政治家の手紙——平田国学者を糸口として 宮地正人 ————— 32

マッカーサーへの手紙 安田常雄 ————— 37

パネル・ディスカッション

十川信介/ロバート・キャンベル/宮地正人/安田常雄/谷川恵一(司会) — 49

閉会のあいさつ 五味文彦 ————— 54

人は、どんな手紙を書いたか

—近代日本とコミュニケーション

あいさつ

本日は人間文化研究機構の第五回公開講演会・シンポジウムにお越しくださり、本当にありがとうございます。

人間文化研究機構というのはまだなじみのない名前ですが、電話で「人間文化研究機構です」と言うと、必ず「はあ？」と聞き返されてしまいます。そのようなわけで少々ご説明いたします。私どもは国立の大学共同利用機関法人で、人文系の五つの研究機関が集まってできました。すなわち、千葉の国立歴史民俗博物館、東京の国文学研究資料館、京都の国際日本文化研究センターと総合地球環境学研究所、大阪の国立民族学博物館の五つです。民博や歴博といわれれば皆様ご存じなのですが、それをまとめている人間文化研究機構のほうは知名度が低いのです。しかし、ともあれこれら五つの機関をくくりにした機構です。

人文科学系が中心ですが、いま申し上げたように、地球環境の問題を研究している自然科学系の総合地球環境学研究所もメンバーに入っており、たいへん異色の組み合わせになっています。研究機関の中には三十年以上も前にできたところもあり、それぞれに長い伝統を持っています。目的も歴史も違います。ですから、お互いの独自性を尊重しながら、緩やかな結合として一つの機構を作ろうというのが設立の際の私どもの考え方でした。

そして、一ぺんそのような結合を作ってみると、自分たちだけではできなかったけれども、一緒にならできるとい

うことがたくさん出てきました。既存の学問の閉鎖性を克服して、自分たちの枠を超えて学問を作っていくというのが人間文化研究機構の目的ですから、たいへん喜ばしいことです。

私たちは各研究機関の枠を超えて「連携研究」や「連携展示」も行っています。二〇〇六年は『古今集』『新古今集』ができてそれぞれ千百年、八百年の記念ということで、国文学研究資料館と国立歴史民俗博物館が連携して展示やシンポジウムを行いました。

人間文化研究機構は本日のような公開講演会・シンポジウムを年に二回開催しております。いずれもそれぞれのデイシプリンを超えた幅広いテーマで新しい学問を目指し、その成果を社会に向けて発信しようというのが趣旨です。すでに五回目となりますが、今回は国文学研究資料館が中心となって企画・立案していただき、その他、東京大学や学習院大学などのご協力もいただきました。テーマは「人は、どんな手紙を書いたか」というものです。幕末から明治の手紙史料を中心に取り上げながら、近代日本の社会や文化をいろいろな切り口から眺めていくという眼目です。

手紙というのは人間のコミュニケーションの中でもきわめて根本的な営みなので、今日は壇上とフロアの垣根を越えて、問題を広く共有できたらと思っております。

石井米雄
(人間文化研究機構長)

人は、どんな手紙を書いたか ——近代日本とコミュニケーション

司会

五味文彦（人間文化研究機構理事）

総合司会を務めます理事の五味文彦です。

本日は五名の先生方に基調講演をしていただき、続いて討論を行います。最初に、本日のテーマの「手紙」について、若干、事前説明のようなことをさせていただきます。

まず、なぜこのようなテーマを選んだかと言いますと、われわれ人間文化研究機構は「人間の文化」にかかわる研究をする場所でありますが、手紙というのは人間が誰かに意思を伝えるための非常に重要なコミュニケーションの手段であるからです。手紙が人間の文化の中で大きな役割を果たしてきたことは言うまでもないと思います。とくに日本においては、手紙はかなり独特のあり方をとってきたのではないかと私は思っています。

「手紙」という言葉を、平凡社の『日本史大事典』（百瀬今朝雄執筆）で引いてみました。すると、カテゴリーの①として、書、書状、書札、書簡、ふみ、消息、手簡、尺牘、尺素、雁書などとあります。この中の呼称のある部分は、中国の言葉を引き継いでいます。し

かし、「手紙」という言葉は日本独特で、江戸時代ぐらいから出てきますが、ここには「手」という文字が含まれており、身体的なものの延長として位置づけられていることがわかります。それだけに、手紙の中には人の心が込められていると考えられ、手紙の反古などを貼りついで、裏側にお経を書くということも広く行われてきました。

先ほど、「とくに日本では独特のあり方をとってきた」と申しましたが、それは、やはり和紙という非常に強靱でしなやかな素材がこの国に存在し、さまざまな形で使われてきたこととかわっています。折紙や巻紙というものがありますし、物に結びついたり、差したりして使うこともあります。紙の裏も使われます。そのようなあり方と関連して、手紙というものがいまに広く残されてきたということがいえるかと思えます。

手紙の呼称のカテゴリーの②は、回李、返報、返札、返書、返状、返翰、回章、答書、勘返状などです。これは手紙の返事についての言い方で、これも非常に多様な表現があります。なぜかと申しますと、手紙と

いうものは一方通行ではなく、常に相手がいて、返事を求めるものだからです。ですから、いかにして返事を書くかということも非常に重要でした。『庭訓往来』などの「往来もの」や、手紙の書き方の礼節について記した「書札札」には、出した手紙と、帰ってきた返事の両方が記されています。

次に、手紙というものが持っている要件についてまとめてみますと、以下のようなことになるかと思えます。

まず一つ目は、言いたいことをどのように伝えるかということ です。すなわち表現や内容です。ここが、書き手がいちばん凝るところだろうと思います。

二つ目に重要な点は、受取人との関係です。手紙というのは、必ず相手があつての行為ですから、人間関係はとても重要です。そのために、どのような文体を使うか、あるいはどのような形式にするか。そこには、相互の関係における身分の問題とか、ジェンダー(性差)の問題なども含まれることとなります。かなで書くか、漢字で書くかといったことも出てきます。

三つ目は、その手紙をどのように伝達するかです。直接渡すのか、送るのか。ただ送るだけでは不足なので、使者をつけることもあります。添状をつけることでもありますし、付文のような形にするなど、いろいろなことが考えられます。

そして、四つ目は何にどう書くか。すなわち、どんな紙を使うのか、筆記具は何を使うのかななどです。こ

こにもさまざまな選択肢があり、黒々した墨ではなく「青墨」といわれる薄い墨を使ったりと、工夫が凝らされます。

日本の人びとはこのように手紙に対してかなり繊細な感性を持っていて、さまざまな使い方をし、そこに思いを込め、豊かな文化を發展させてきました。

そして、そのように展開してきた手紙が、近代の新しい社会を迎えたときにどう変わったのか。これが非常に大きな問題です。手紙は時代とともにどう変化したのか。たとえば、伝達手段としては郵便制度が始まりますし、何に書くかという点では、洋紙などいろいろな素材が入ってきました。世の情勢や政治的な変化などにもなつて、手紙に書かれる内容も、書き方の形式も変わっていきました。

近世から近代にかけて、あるいは現代にかけて、いったいどんなことが起こったのか、手紙の文化はどのように変わっていったのか、これから五人の先生方にそれぞれ違った視点から話していただきます。その後、パネル・ディスカッションを開いて、皆様に総合的に話し合っていたきたいと思います。

では、最初の基調講演を学習院大学教授の十川信介先生にお願いしたいと思います。十川先生は学習院大学にお勤めと同時に、日本近代文学館の専務理事を務められており、日本近代文学の牽引役として活躍されています。今日は「候文の優勢と言文一致体の台頭」というテーマでお話をお願いしています。

候文の優勢と 言文一致体の台頭

十川信介
(学習院大学・教授)

候文から言文一致体への 移行の時期

私はいま、日本近代文学館からシリーズで六冊ほど出している「文学者の手紙を読む」の編集に当たっています。明治時代の文学者の手紙を読む機会が多いので、このシンポジウムにも呼んでいただいたのだと思っています。

時間の関係で概要だけしか述べられませんが、本日は、江戸時代からひき続いて明治時代に手紙の文体として主流であった「**候文**」と、明治半ばごろから徐々に台頭してきた「**言文一致体**（口語体）」が、どのように交錯し、交わり合ったかということをお話したいと思います。

「候文」というのは「一筆啓上仕り候、小生近來〇〇致しおり候」といった調子の文体です。最近はまったく見なくなりましたが、私の学生のころには、死亡広告はまだ「父何某、薬石効なく何月何日死去仕り候」といった文言だった記憶がありますので、一九五〇年代ぐらいまではかろうじて生きていたと思います。また、結婚式の招待状も候文のものが多かったようです。ですから、重

大な儀式の文章としては、六十年ほど前までは生きていたわけです。しかし、現代ではもう完全に死滅してしまいました。

候文から言文一致体への移行の時期、手紙の書き方として言文一致体が優勢になってくるのは、明治三十五〜三十六年ごろと思われる。日露戦争を境にして、主に若い世代で頻繁に使われるようになったのです。ですから、日本の書簡文の形式が変動を始めたのは日露戦争のころからと言ってよいと思います。

明治の青年、天保の老人

それをよく表しているエピソードがあります。森鷗外の上司に当たる軍医総監で、鷗外の私生活にもずいぶん干渉した石黒忠愍という人物がおり、その人が明治四十二年の『実業之日本』でこんなことを言っているのです。世の中に言文一致体が幅をきかせはじめたことを受けて、「自分は古いせいかもしれないが、手紙の文章は候文でない」と嫌だ。とくに言文一致で書いた借金の申し込

みには絶対に貸してやる気がしない」と。この話は森鏡三さんの『明治東京逸聞史2』に採録されています。

それを証明するような話が、夏目漱石の絶筆になった小説『明暗』（大正五年）にも出てきます。主人公の津田はサラリーマンですが、三十歳を過ぎてもまだ親から仕送りを受けていて、奥さんと二人でけっこうぜいたくな生活をしています。それを妹が告げ口したため、お父さんは怒って送金してくれなくなりまし。お父さんは京都に住んでいますので、津田は、何とかして従来どおりお金を送ってもらえないかという手紙を書くことにしました。

このとき彼は、普段使っているラベンダー色の便箋に万年筆で手紙を書きかけます。ラベンダー色なんてキザな男だと思えますが、ともかくそれに書きかけました。しかし、そこで、「うちの親父はだらしない言文一致の手紙は大嫌いだ、ましてや金を送ってくれという話なのだからなおさらマズい、筆を使って候文で書かねば」と、ハッと気づく。しかし、そんな用意はないので、下女に命じて巻紙を買って来させ、堅苦しい候文を書くのです。

これはどういうことを意味しているかと言いますと、この小説が書かれた大正五年ごろには、津田のような現代青年はペンを使い、洋風の便箋に言文一致体の手紙を書くのが当たり前になっていた。しかし、そんな青年でも、正式な依頼や改まった場合では候文を使わなければいけないという意識がまだ尻尾のように残っていたということです。そして、上手へたは別として、彼らに候文を書

く能力があったということ。

徳富蘇峰とくみそほうが言った言葉に、「明治の青年、天保の老人」とくみそほうという表現があります。いまお話しした石黒忠憲などは、まさに天保のすぐ後の弘化二年（一八四五）の生まれですから、明治末く大正には老人です。代わって、明治生まれの若い世代が台頭してきて、彼らの新しい文化が主流になる。天保の老人たちは「おれは古いのかな、頭が固いのかな」と言わざるをえないような状況になるわけです。日露戦争のころが手紙の文体の分水嶺ではないかと言いましたが、そのころにはそのようなせめぎあいがあったのです。

ちなみに、「手紙」以外の文体について申し上げておきますと、大新聞の論説・記事が口語体を採用しはじめるのは大正九年ごろです。それまでは擬古文や漢文崩しの文語文で書かれており、こちらのほうが「普通文」でした。これに対して「小説」の世界は突出して早く、明治二十年過ぎから徐々に言文一致体が主流になっていきます。この現象は文学の世界ではかなり注目すべきことで、これから十分考えるべきだと思います。今日はこの件についてはお話できませんが、書簡文の文体のほうが小説の文体より十年、二十年遅れていることの意味はけっこう大きいのではないかと思います。

江戸時代から引き継がれた候文

ここで、明治以前の手紙文について、少しだけお話し

ます。

明治時代の候文は、江戸時代からの手紙の伝統を引き継いだもので、江戸時代には先ほど五味文彦さんがおっしゃったような往来もの(消息文)の文例がたくさんありました。その文例は『日本教科書大系』や『節用集大系』という書物にたくさん収載されていますので、興味のある方はご覧いただければと思います。

どんなものかと言うと、ほとんど候文で、紋切り型というか、決まりきった型の手紙の書き方です。ちなみに、昔は当て字が非常に多く(例・不落離、去来、鼠栗々々など)、いま見ると、こんな当て字で読めるのだろうかと思ってしまう。寺子屋で教えるような類の例文もありますし、商人が使うような手紙などもたくさん載っています。

そうしたものを受け継いで、明治五年に学校制度ができてきます。明治時代の小学校は、尋常小学校(四年間)、高等小学校(四年間)と称していて、計八年間です。子供を学校へやらない親もたくさんいましたが、いちおう前半の四年間が義務教育になっていました。

その尋常小学校の四年生あたりに「書牘」という時間が設けられ、手紙の書き方を教えました。岩波書店の『新日本古典文学大系 明治編』に、当時の民間教科書が一つ載っています。これを見ますと、手紙文が載っていて、例文のいたるところに窓が空けてあり、ここにこの文字を入れなさい、あの字を入れなさいといった具合に、手紙の書き方がわかるように書いてあります。もちろん全

部候文です。

そのような影響もあり、明治十年代の日本人の手紙の文章はことごとく候文でした。ただし、同じ候文でもみなが上手だったわけではなく、とくに女性の場合は問題が多かったようです。当時の『女学雑誌』に、女の文章くらい何を言っているかわからないものはないと苦言を呈しているものがありました。女性の手紙はやたらに「参らせ候、参らせ候」ばかりだからです。「一筆示し上げ参らせ候、これは本当の候には御座無く候、今度の候が本当の候に御座候」というような、男が女の手紙をばかにした文章もありました。樋口一葉の『通俗書簡文』の例文も候文です。

言文一致の最初 ——小池正直の手紙

では、言文一致の手紙というのは、誰が最初に書いたのでしょうか。もちろん正確なところはわかりませんが、私知知っている限りで申しますと、北村透谷きたむらとうこくが義弟に宛てた手紙や、森鷗外の先輩で、鷗外の研究家からはちょっとした敵役のように思われている小池正直という、後に男爵になった軍医総監の手紙ではないかと思えます。鷗外と小池は一緒にドイツに留学していた間柄です。手紙はどちらも明治二十年代初頭です。透谷のものは『透谷全集』でご覧いただくとして、ここでは小池の手紙をご紹介します。

帰国した鷗外は、『東京医事新誌』という医学会の雑誌で猛烈な啓蒙活動を開始し、日本の医学界が年功序列で、ボスに支配されている弊害を痛烈に批判します。同じころに小池正直が二人の恩師であるペッテンコーフェルというドイツの医学者の簡単な伝記のようなものを書くのですが、鷗外はそれを「ペッテンコーフェルの逸事」の名で同誌で紹介し、これは伝記ではないだろうと、ちよつと難くせをつけた。小池の手紙は、この鷗外に対して明治二十二年四月に書いたものです。この手紙は現在、『男爵小池正直伝』という本に収載されています。

こんな手紙です。まず、「吾兄才変リハナイカ」。小池のほうが年上ですが、いちおう敬称として吾兄と言っています。そして、こう言うのです。「近来新聞屋ヲ御兼職ト見エテ、中々出スゼ。例ノ該博快筆ニハ感ジ入ル。医事新誌モ才蔭デ花ガ咲イタ」。そんな調子の言文一致の文章です（『与森林太郎書』）。

お聞きのとおり、かなり悪意に満ちた手紙です。小池はものすごく腹が立っていたのだと思います。後輩の鷗外が日本に戻ってばりばりと医学界を批判している。そして、こともあろうに自分が書いたペッテンコーフェル先生の事歴に対してケチをつけた。これ以外に残っている小池正直の手紙はみな候文ですから、この手紙は意図的に言文一致体で書いたものと思われまます。

その意味では、言文一致体は、相手に嫌味を言ったり、直言したりしたいとき、つまり、本当に言いたいことを言いたいとき、生の感情を相手にぶつきたいときに使わ

れたということになります。「中々出スゼ」などという言方は相当なものです。「お前さんは新聞屋になったとみえるね」という意趣返しだったのでしょう。

探せばもつとあるかもしれませんが、いま知っている限りでは透谷や小池のものがいちばん早い言文一致体の手紙です。

直情をあらわす言文一致体

比較的早い時期に書かれた例を、他にもいくつか挙げます。

まず、樋口一葉宛てに、戸川秋骨が明治二十八年に書いたものです。一葉の家は女所帯で上がりやすかったので、戸川秋骨や馬場孤蝶などが訪ねてきて、いつまでもぐたぐたと管をまいて帰らないことがよくありました。一葉の妹がほうきを立てて早く帰らせようとしたという話も残っているほどです。そのようなわけで、一葉はときには居留守を使い、彼らに門前払いを食わせるようになりました。それを感じたのか、秋骨は嫌みったらしい手紙を一葉に書いています。

「僕ハネ、昨日小田原へ来テネ、兄サンニ会ツタノ。(中略)オバサマニモタントオ話シタイコトガアツテ、(中略)オ暇ニナツタラ行キマスカラ(中略)遊バシテ頂戴ナ。いい年をした男が、「遊ばして頂戴な」もない。じつに変な手紙です。しかも一葉のことを「おばさま」などと呼んでいます。要するに、わざと一葉をおばさまと呼んで、自分は

幼児のようなふりをして、「遊んでちょうだい」と言っているわけです。

島崎藤村や斎藤緑雨などにも言文一致体の手紙が少し残っています。緑雨は一葉とも深い関係があり、一葉に「この男は敵としても頼もしく、味方にしたらもつと頼もしい」と言わしめた男ですが、言文一致体が大嫌いで、蛇蝎のごとく憎んでいました。ところが、明治二十九年に、借金で苦しんでいるとき、親友で国語学者の上田萬年に「苦しめて堪まらぬゆゑ。例の言文一致で御免蒙ル」と言つて、言文一致の手紙を書いています。

言文一致の場合は、言葉遣いを考えたり文章を整えたり気遣いをあまりしなくていいわけですから、当時の意識では「あまり頭を使わない手紙」ともいえます。ですから、登場しはじめた初期のころには、けつして上等なものとはみなされていませんでした。むしろ、言葉遣い自体が下品と思われていたほどです。

小説の中に登場する手紙で、これも私の知っている限りでいちばん早い口語体は、明治二十四年に若松賤子が翻訳した『小公子』(Little Lord Fauntleroy)です。その中で、イギリスへ行って侯爵の後継ぎになるセドリックが窮地に陥ったときに、アメリカのディックという靴磨きが彼を心配して必死になって手紙を書く場面があります。こんなものです。

「ホップス旦那のところへもわしところへもおめへの手紙がとゞいた。おめへも運のまはり合せがわりくなつて気の毒だ。なんでもしつかりふんばつてゐねえ。人にい、かけ

んのことされちやいけねい。よつほどふんどしい堅くメてゐねいと、どろぼう根性のものにい、やうにされるぞ」

ディックは手紙など書いたことがないので、このような乱暴で、しかし真情にあふれた言文一致体の手紙として訳されたわけです。ここには、言文一致体が表現する直情と俗な言葉に対する明治二十年代の認識が見てとれます。

しかし、そのような認識がある一方で、言文一致を支持する人はだんだん多くなつていきます。候文は確かに礼儀正しく、上品ではあるけれども、形式的で型が決まりすぎているので、自分の本当の気持ちを表しにくい。これからの時代は感情をストレートに表現できる文体こそふさわしいという考えが広がつていったのです。この考え方が次第に強くなつていって、候文をしのぐ勢いになるのが、先ほど申し上げた日露戦争のころなのです。

目上には候文、 近親者には言文一致

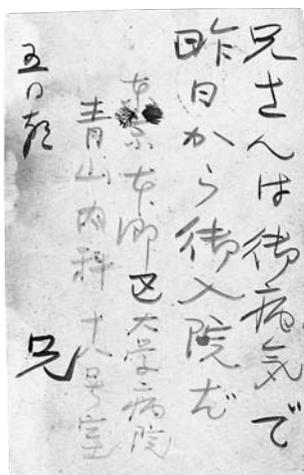
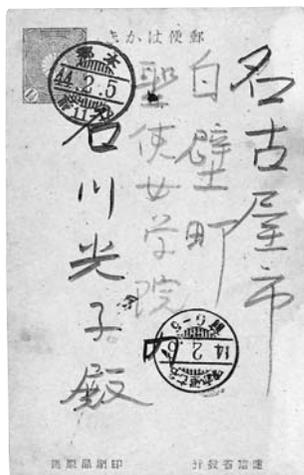
早い時期に書かれた言文一致体の特徴をもう一つ言い添えますと、家族や親しい友達など「近親者」に書く場合に多く用いられたということです。

この例で非常に面白いのは石川啄木で、親友、妹にはほとんど決まつて言文一致の手紙を書いています。とくに光子という妹に対してはきわめて乱暴な書きぶりです。「兄さんは御病気で昨日から御入院だ」とだけで、その後病院の名前と病室番号だけ書きなぐつたはがきが残つ

ています(図①)。

啄木だけではありません。国木田独歩も森鷗外も、奥さんに対してはべたべたした甘い言文一致の手紙を書いています。とくに、日露戦争の最中に鷗外が戦地から奥さんに宛てたものなどを見ると、「おまえ、どうしている?」「大丈夫かい」「早く会いたい」といった調子で、あの堅い鷗外がいったいどんな顔をして書いたのだろうと想像すると、おかしくなります。

当時の文筆家はおおむね言文一致体の手紙には懐疑的だったのですが、その中で例外的に早くから言文一致推



図① 石川啄木の妹・光子宛てのはがき(日本近代文学館蔵)

進論者であったのが夏目漱石です。しかし、その漱石も、言文一致で書く相手は決まっていました。多くは妻、子供、そして弟子たちです。とくに森田草平や鈴木三重吉など、自分に迷惑ばかりかけている連中には言文一致体で容赦なく、といつてもユーモアを交えて思ったとおりのことを書きました。そんな手紙がたくさん残っています。

漱石と親友だった正岡子規も、晩年には言文一致で書いています。いちばん悲痛な手紙は、彼が晩年、ロンドンにいる漱石に送った手紙で、「僕ハモーダメニナツテシマッタ」「僕ハ迎モ君ニ再会スルコトハ出来ヌト思フ」といった内容の遺書のようなものです。その手紙は、三巻分冊で出版された『我輩ハ猫デアル』の中編の序文に引用されています。文庫本には収録されていませんが、初版の復刻版か何かをご覧になれば見ることができると思っています。

手紙は必ず對他関係を含んでいるもので、誰に、どのようなケースとして手紙を書くのかということが非常に重要になります。ですから、当時は「手紙を出す相手」によって候文と言文一致体を使い分けることをしたわけです。

私の考えでは、このように時と場合と相手と内容によって文体を使い分けていたところにも、当時の手紙の豊かさがあったのではないかと思います。ですから、現在のように相手が誰であろうと、「じゃあね」とか「マジ?」などと書いているメールを見ると、これが手紙であろうかとすら思うことがあります。

もつとも、当時の手紙の中にも、言文一致体と候文がごちゃまぜになつたようなものが相当ありました。「拝啓、御無沙汰仕り候」で始まって、途中から「です、ます、だ」のような言文一致になって、それから、また、終わりのほうで「何とか申し上ぐべく候」と候文に戻って、「恐々謹言」とくつつけたりする。新しいものがすべてよいものではないはずで、言文一致も次第に立派な手紙を生みますが、私はそれとともに昔の候文のよさも再認識したいと思つていきます。

言文一致に保守的だった男性

そろそろ時間がなくなつてきましたので、候文と言文一致体がせめぎあいを強めてきた明治三十年、四十年代の状況の特徴を、駆け足で眺めたいと思います。

明治三十年代あたりになると、いわゆる家庭小説というものが流行して、小説の中に手紙を挟み込んだスタイルがしばしば登場するようになります。菊池幽芳の『乳姉妹』や田口掬汀の『女夫波』の中では、とくに女性の手紙がところどころ言文一致体で書かれています。

それが非常にはつきりするのは田山花袋が明治四十年に書いた『蒲団』で、芳子という不良女学生は、竹中古城という先生に甘つたれるときは言文一致の手紙、ご乱行が過ぎて故郷に帰されたときの挨拶文は非常に硬い候文を書いていきます。

明治四十二年に、森田草平が平塚らいてうとの恋愛事

件を元に『煤煙』という小説を書きますが、その中の真鍋朋子というらいてうをモデルとしたヒロインも、あるときは言文一致で書き、あるときは候文で書くというように、都合によつて両者を使い分けています。

やがて明治も末になると、『青鞥』の運動が始まります。青鞥の人たちの多くは言文一致の手紙を書きます。田村俊子や尾竹紅吉などは言文一致です。

当時の手紙をよく見ると、面白いことに総体として男のほうが遅れている、それまでの候文の枠に縛られて、言文一致に簡単には手を出さない傾向があります。男が言文一致の手紙を書く場合は、相手が対等か、目下の場合が多いようで、その意味では、言文一致というのは、「ジェンダー」の意識とも非常に強くかわるのかもしれない。

言文一致の小説家として有名な二葉亭四迷と山田美妙は、晩年になるまで妻にも言文一致体の手紙はほとんど書きませんでした。考えてみれば、日本の夫はよほどのことがないと妻に手紙など書きません。書くとするれば、外国に行つてるときや入院したときなどです。亭主の活券にかかわると思つているのか、そんなところが感じられます。そのくせ、美妙も実家に帰つた妻に対してはたいへんやさしい言文一致の手紙を書いているので、なかなか一括りには説明できないところがあります。

先ほど鷗外が妻宛てに言文一致の手紙を書いたこと、また漱石が言文一致推進論者であったことを言いましたように、それぞれの作家によつて個性の違いもあり、考え方の違いもあるので一概には言えないのですが、全体と

して見れば、文学者には候文にこだわる人が多かったと思います。彼らは「手紙は文章である」という意識が強いので、おいそれと軽い文章は書けなかったのかもしれない。

大町桂月けいげつという有名な文学者で、桂浜や層雲峡そううんきょうなどの名前をつけた旅行家があります。この人は明治三十九年に『書簡文作法』という本を書いているのですが、その中で、「候という言葉は、話し言葉ではすでに死んでいるけれども、文章語としてはまだ生きているのだから、やはり候文を書こう」と主張しています。

もう少し下って芳賀矢一あたりになりますと、言文一致を書こうと唱えています。ところが、彼の手紙を見ると、どれも候文です。それを見ると、理想と実際とが分離しているような感じがします。世の趨勢を見て新しいことを唱えながらも、自分は生理的に候文の型から逃れられなかったということでしょうか。

失ったものと得たもの

さて、近代の手紙の歴史において大きなエポックになったのは、明治三十五年に官製の記念絵はがきができたことです。万国郵便連盟への加盟二十五周年記念で出され、以後、絵はがきが大流行になりました。ブームを受けて、『手紙雑誌』『ハガキ文学』という雑誌も登場します。これらはその後の書簡の行方に大きな影響を及ぼしたと思います。

雑誌については、この後に谷川惠一さんがお話されると思いますので詳しいことは申し上げませんが、少しでも言わせていただくと、『手紙雑誌』に書かれている意見では、言文一致派と候文派がだいたい半々でした。有名人は、言文一致に反対です。露骨に感情を表に出すことが、対人関係において果たしていいのかという点で意見が分かっていたのです。言文一致派はほとんど、もって回ったような言い方をせずに、言いたいことはストレートに言うべきだと言っています。

その中で一人についてだけ申し上げておきます。五十嵐力という、早稲田大学の日本語日本文学の先生が、明治四十四年に「言文一致と候文は、やはり使い分けたほうがいいのではないか」と述べているのです。「いまのところは候文がまだ優勢であるが、十年後には言文一致が優勢になっているだろう。しかし、手紙というものは話し言葉をそのまま書けば文になるというものではない。どちらが完成度の高い美しい文章であるか考えてみると、やはり現時点では候文に軍配が上がる。言文一致はまだ未熟である」といったような趣旨です。

この時点では私も同感です。とくに達筆で文才のある方が書いた候文の手紙は本当に優雅です。文字といい、用紙といい、文の姿といい、みやびの精神が生きています。それに比べると、言文一致の手紙は字がへたなものが多いし、原稿用紙にペンでなぐり書きしていたりして、あまり格好はよくありません。下手くそでも意味さえ通ればいいと言ってしまえばそれまでですが、やはり優れた候

文の手紙は情理兼ね備え、一つの芸術品のようなところがあります。

このシンポジウムのお話を受けたとき、日本近代史の中で手紙というものを概観して、失ったものと得たものについて話してください、というようなことを言われました。あえて早急にその答えを出すとすると、失ったものはそうした文雅の精神のようなもの、得たものは簡略、直截、率直の考え方のような気がします。

ともあれ、文章としての言文一致体の手紙が完成するのは、やはり大正になってからではないでしょうか。五十嵐さんもおっしゃるように、明治の言文一致の手紙は未熟です。明治四十三年に、近松秋江が『別れたる妻に送る手紙』という男の愚痴を綿々とつづった書簡体小説を

書きます。そのころから言文一致体の手紙が一気に流行し、徐々に洗練された文体として市民権を得ていくように思います。

五味 ありがとうございます。いまは手紙の文体もへったくれもないといった状況になっていますが、うかがっていて、候文が持っていた意義、文章の優雅さといったものをもう一度再確認しないといけないと思いました。

次は国文学研究資料館の谷川恵一先生から「手紙の時代」ということで報告を賜りたいと思います。谷川先生も近代日本文学の気鋭の研究者で、このシンポジウムのコーディネーターもしていただいています。よろしくお願ひします。

手紙の時代

谷川恵一
(国文学研究資料館・教授)

「趣味」という時代のキーワード

本日のシンポジウムのテーマは「手紙」です。なぜ手

紙かと言うと、手紙というものの中には、この国のさまざまな文化的な問題が集約して表れているからです。

日本の手紙が大きく変化するのは明治三十年代の後半

で、ちょうどいまから百年ほど前の日露戦争のころに、顕著な変動が起りました。先ほどの十川信介先生は、その中でも文体や形式に起きた変化について報告されましたが、私は少し視点を変えまして、手紙をめぐる文化的な流行現象のようなことについてお話ししたいと思います。手紙の中でも、とりわけ「はがき」について言及いたします。

そのために、具体例として三つの材料を用意してきました。明治後期に刊行されていた『新小説』『手紙雑誌』『ハガキ文学』という三つの雑誌です。この三つの雑誌を見ながら、当時、手紙の世界にどのようなことが起こっていたかを考えてみたいと思います。

その際、当時の文化状況の中に「趣味」という言葉を置いてみようと思います。

趣味という言葉はいまでは新しくも珍しくも何ともありませんが、明治以降に翻訳語として登場した言葉であり、けっこう新鮮な概念でした。早いところでは明治の初めごろに翻訳された『西国立志伝』に、英語の「taste」が「趣味」と訳されているのを見ることができますが、一般の人びとが日常生活で普通に使う言葉として定着するのは明治三十年代後半以降です。このころに、夏目漱石が「趣味の遺伝」という作品を書いていますし、『趣味』というタイトルの自然主義系統の文学雑誌も登場します。明治三十年代後半からの時代の空気に一つ名前をつけるとしたら「趣味」ではないかと私は考えています。

「文界の嚮導者」としての『新小説』

では、一つ目の雑誌の『新小説』です(図①)。この雑誌は春陽堂から出されていたもので、明治三十六年の正月号から誌面の改良を行いました。

それまでの雑誌の多くは地味で、見た目もモノトーンの世界でした。色がついているのは表紙くらい、挿絵があってもだいたいはモノクロです。ところが明治三十年代ごろから雲行きが変わってきて、豊富に色が入るようになり、誌面も柔らかく、エンターテインメント性の高いものになっていきました。そうした流れのなかで、『新小説』もリニューアルを行ったわけです。

こちらに挙げますのは、そのリニューアルのお知らせの広告です(図②)。自分たちは「文界の嚮導者」であり、「新しい趣味の開拓者を目指す」と高らかにうたい上げて、いろいろと改良点を挙げます。

紙は舶来ものの光沢紙を使い、浅井忠にパリの風俗画を描かせます。そして、「極彩色の絵はがき」を付録としてつけ、また「読者から懸賞つきで言文一致書簡文を募集して、当選したものを載せる」とあります。これが『新小説』の大きな売り文句になっています。

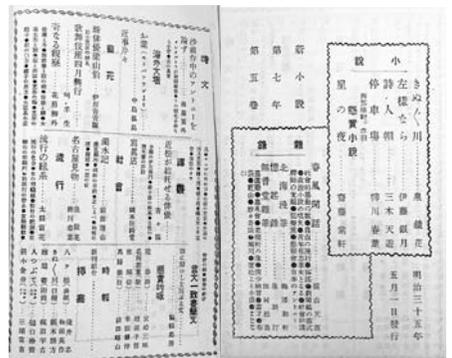
舶来、極彩色、言文一致書簡を主要な武器として、新しい時代の文化の雰囲気を作り上げようとしている。そのような形で、文界のリーダーとして、趣味の世界を開拓していくと言っているわけです。



図① 『新小説』第6年第12巻表紙(山梨大学附属図書館蔵)



図② 『新小説』の誌面リニューアルにあたっての広告。明治35年(同)



図③ 『新小説』の誌面構成(同)

誌面構成(図③)を見ると、小説、雑録、時文、海外文壇のほか、歌舞伎や新派などの芸苑、ちょっとした面白いお話を集めた譚叢、地方の様子なども記した社会の記事もあります。着るものの流行などについても載せています。大きな売りはビジュアルですから、もちろん挿絵入りです。こうしたものが雑多に集まっており、今日で言うところの「総合雑誌」で、いわゆる「文芸雑誌」とは相当趣が違ってきます。

芝居の話とか、何がはやっているとかが、どこでどんな面白い話があったとか、海外の動きはこうだとか、面白ネタがごちゃ混ぜになっており、そのごちゃ混ぜ感が、まさに「趣味」というものの圏域を形作っていると私は思います。その中に、「言文一致書簡文」が入っているわけです。

絵はがきの大流行

当時の『新小説』はいまでもかなりの数が現存しており、私どもの国文学研究資料館でも目にすることができますが、雑誌の目玉だった付録の絵はがきはほとんど残っていません。ごくまれに残っているのを見ると、表紙をめくってすぐのところ綴じこまれていて、ミシン目に沿って切り取るようになっていたようです(図④)。残っていないというところは、人気があつてよく使われたということでもありますし、また、読者がこの綴じ込みはがきを切り取って、さかんに『新小説』に投稿したということもあると思います。

ここで、「はがき」についてちょっと説明いたします。日本で公式に「官製はがき」が登場し、定価が決まった

のは明治六年です。これが手紙の歴史の中でまず大きな節目となりました。その後、明治三十三年に郵便規則第十八条により、「私製はがき」の発行が許可されます。これが一般の人びとの通信、そして手紙の文化において非常に大きなターニングポイントになりました。同じ年の通信省告示第三百五十八号で、私製はがきの場合はこのような基準で作りなさいといった具体的な指示も出され、いろいろな業者がいろいろなものを売り出すことになりました。こうして絵はがきはちやく大流行になります。

当時の当局者の談や、私製はがきをめぐると言説などを見ると、スタートのころの私製絵はがきはあまり上等ではなかったようで、ヨーロッパのはがきと比較すると非常に卑しいとか、ビールのレッテルのように下卑ているとか言われていました。しかし、次第に京都や奈良にあった美術品の写真を印刷したりなどするようになり、レ

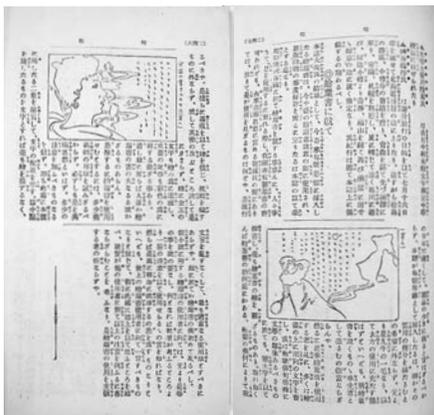
ベルが上がっていきました。人びとからも、もっと立派な絵はがきを出してほしいという要求が高まり、なかには、西洋に負けないような高尚で芸術性の高いはがきを作って、国民の美術教育をしてほしいという意見もありました。そのような人びとの要求を受けて、美的にも優れたものがどんどん登場してくるのです。『新小説』の付録の「極彩色の絵はがき」というのは、このような流れの中で生まれてきたのです。

絵はがきは雑誌の付録としてつけられる場合もありましたが、単品としても、多くの出版社や書店が作っていました。当時の一流の画家を動員し、絵はがきとしても使えて、画集としても見ることができるといようなものも登場しました。そのような形で、さまざまな絵はがきが大量に出回ったのです。

『新小説』の中に、「絵葉書に就て」というちよつと面白



図④ 『新小説』に縦し込まれていた付録の絵はがき。明治三十七年(同)



図⑤ 『新小説』に掲載されていた「絵葉書に就て」の記事。明治34年(同)



図⑥ 『新小説』で募集された言文一致書簡「酒に酔ひしを託る文」(同)

い記事が載っています(図⑤)。図解つきで絵はがきを示し、文字の書き入れ方について教えた記事です。というのも、せっかく写真や絵が入ったきれいな絵はがきなのに、絵を無視してその上に無遠慮に字を書いてしまう読者が多かったからです。ちなみに、夏目漱石の絵はがきにもそのようなものがあります。絵の箇所を避けて、余白のところを字を書きましよう、懇切にいねいに説明しています。それによって初めて、絵入りの私製はがきの美術的用法が高まると言っています。

「言文一致書簡」の投稿

このようにして、『新小説』は趣味としての絵はがきの世界をリードしていくのですが、では、この雑誌が行っていた「言文一致書簡の投稿」というものについてお話します。

どんなものかと言いますと、編集部の方がいろいろとお題を出し、読者はそれに即した手紙を言文一致体で作文して投稿するのです。かなり奇妙奇天烈なもので、「人は、どんな手紙を書いたか」というシンポジウムのテーマとは違うではないかと怒られてしまうかもしれませんが、当時の世に言文一致体の手紙がはやっていったことの裏側には、こうした雑誌メディアの影響も大きかったのではないかと思います。

ある号では、「酒に酔ひしを詫る文」というのが題になりました(図⑥)。つまり、酒に酔っぱらって醜態をさら

したことに對して弁解をする手紙を書きなさいというわけです。懸賞ですから、読者が投稿してきたものを編集部が審査して、一等、二等……などを決めて掲載し、賞金をあげます

このとき一等になったのは、東京の川村久輔という人で、「酒に酔ひしをわびられたるに返事(叔母より)」という文章です。「許して上げる事は上げますが、たとへ御酒の上だつて、今度からは、あんなにだらしがなくなつてはなりません、決してあがるなどは云ひませんが、余り過すと身軀にも障り、又悪所通ひをする様にもなります」と書いてあります。末尾はすわりがいいのか悪いのかわかりませんが、「いやな人だよ、憎いねえ」などと結んでいます。酔って醜態をさらした甥が叔母さんに謝りの手紙を書き、それに対して叔母さんが返事を書いたというシチュエーションです。

いまの目で見ると、このような文章を作ることの意味自体わからない感じもするのですが、当時の人は子供のころから学校で「腰に酒をぶら下げて墨堤に遊ぶ」とか、絶対にありえない作文を書かされていましたので、あるシチュエーションを想定して文章を書く訓練は早くから受けていたのかもしれませんが。

三等を取っているのは女性で、「あなた、あなたはほんとうにお人が悪いよ」とか、「堪忍して下さいな」といった調子の、かなり色っぽいくねくねした手紙です。

こちらに、この雑誌の言文一致書簡の募集の頁をお見せします(図⑦)。次のテーマは「海水浴に誘ふ文」だと

言っています。字数は半紙一枚四百字以下とのことです。懸賞は毎号行われており、審査は最初は編集部で行っていましたが、後に作家が審査することになりました。泉鏡花なども選者になっています。

高等なるおもちゃ

『新小説』に続いて、二つ目の雑誌の『手紙雑誌』に移ります。いままで述べてきたように、明治三十年代あたりから、手紙をめぐる文化運動とまではいきませんが、手紙の中に新しいものを求める動きが顕在化してきます。その一つを担ったのが『手紙雑誌』です。

ここにお見せするのは、その第一巻第二号の表紙です(図8)。ハイカラな緑色で、かなり趣味的です。手に取ってみるとおわかりになりますが、アート紙のようにならずしりとした舶来らしき紙を使っています。『手紙雑誌』

は明治三十七年から明治四十三年まで号を重ねました。

中身は、洋の東西、古今を問わず、有名人の手紙を集めるといふものです(図9)。雑誌では「これらの手紙を集めて読んで修養のために使いなさい」というようなことを言っていて、西郷隆盛や大倉喜八郎、森鷗外、後藤新平など、文人や政財界人の手紙が載っています。おおもね有名どころの手紙ですが、どこかの会社の社長の奥さんの手紙なども混じっています。史料価値があるものの中にはありますが、かなりごちゃ混ぜです。ともあれ、こうした内容の雑誌が登場するところに、当時の人びとの手紙に対する関心の高さがうかがい知れるわけです。

『手紙雑誌』がどのような狙いをもって刊行されていたか、彼ら自身が言っているところを紹介しますと、手紙は「気品高く、清き家庭の高等なるおもちゃ」だということです。そして、この「おもちゃ」は、自身の修養の資料となると言っています。手紙は趣味と実益を兼ねるといふこと

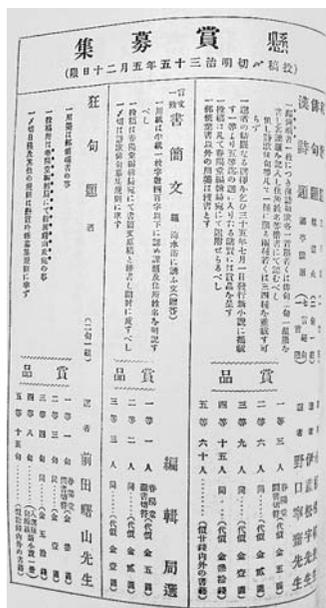


図7 『新小説』中、言文一致書簡文の募集の頁(山梨大学附属図書館蔵)



図8 『手紙雑誌』第1巻第2号表紙、明治37年(国文学研究資料館蔵)

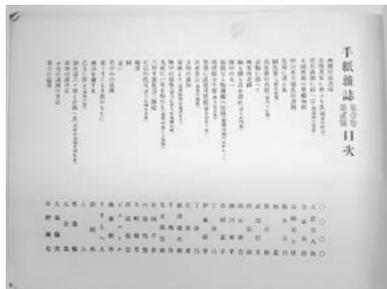


図9 『手紙雑誌』第1巻第2号の目次(同)

をうたっていて、かなりハイブローな雑誌としてスタートしていたことがわかります。

この『手紙雑誌』も多分に漏れず手紙の懸賞を募っているのですが、これまた今日の目から見ると相当調子が変わっていて、見ていると笑ってしまうようなものがあります。

たとえば、ある号では、選者は幸田露伴、一等は賞金十円という高額で、「広瀬中佐夫人に寄する文」というものを募集しています(図⑩)。ご存じのように広瀬中佐は日露戦争の軍人で、その名を国民にあまねく知られた英雄的人物です。「杉野はいずこ」という有名な言葉を知っている方も多いと思います。その広瀬中佐には奥さんはいなかったのですが、雑誌では「旅順に戦死されたる故広瀬中佐に夫人なきは人の知る処」だが、「今若ありと仮定せば」として、その未亡人に、夫の戦死を慰める手紙を書いてきなさいと言っています。決してふざけているわけではなく、しごく真面目にやっています。

この背景には、折しも世に登場した絵はがきで、戦地にいる兵隊さんに便りを出そうという動きが大運動となっていたことがあります。手紙を介した戦場と銃後のコミュニケーションのようなことが活発に行われていたのです。ちなみに、国木田独歩の『愛弟通信』などは、そのような文脈から書かれた作品です。そんな濃密な時代の空気の中で、このような一見荒唐無稽なテーマが大まじめに出されたのだらうと思います。

絵はがき交換ブーム

『手紙雑誌』は、その他にも新しい企画をいろいろ登場させるのですが、なかでも注目に値するのが、「絵葉書交換会」というものです(図⑪)。

「交換会」といっても、実体のある組織でも何でもありません。参加した人びとをゆるやかな組織形態と見なし「会」と名づけているのです。参加には何の資格もありませんでした。

この「交換会」のやっていることが、非常に面白いのです。投稿者たちははがきにちよつとした自己紹介のよな文言を書いて、切手を貼って編集部に出します。すると、編集部がそれを見て、「この人とこの人は合いそうだ」と判断した相手の宛名を書いて送ってあげるのです。その後相手から手紙が来たら交際を始めなさいという仕組みです。雑誌が、趣味をベースとしたインテイメータな人間関係の構築に力を貸すわけです。

これは非常に受けたようので、編集部には二千枚ぐらいはがきが集まり、アメリカや台湾からも来たということです。国内外津々浦々からすごい反響があったそうで、毎号のように絵はがき交換会の記事が出ています。

この絵はがき交換はどんな世の中に広がっていき、新聞社が同じようなことを始めるとか、あるいは絵はがき交換に投稿していた人間が、今度は「○○絵はがき交換会」といったものを自分たちの地元で作り上げるとか、いろいろな形で波紋が広がっていきます。

親愛、友愛をうたつた 『ハガキ文学』

では二つ目の雑誌の『ハガキ文学』に参ります(図⑫)。

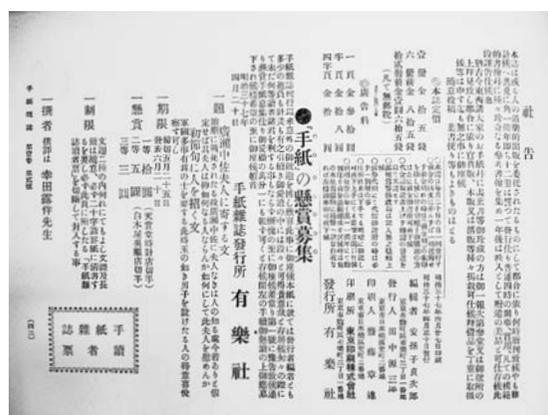
『手紙雑誌』というかなりハイブローな雑誌で、お互いの趣味を交換するような形で始まった絵はがき交換会です。これが受け継いで出てきたのが『ハガキ文学』です。

明治三十七年に第一号が刊行され、明治四十三年まで続きました。やっっていることは、『手紙雑誌』とほとんど同じです。第一号に載っている「会則」に「本会へ入会せんと欲せば最初入会金十銭会費三十銭を払うべし」とあり、お金さえ払えば誰でも入れました。資格は一切問いません。面白いのは、会員になったら、当時はやっていた徴

章(メダル、勲章)をあげるといふことで、これが一つの売りになっていったようです。

『手紙雑誌』は有楽社という会社組織が発行所になっていましたが、『ハガキ文学』の発行元は「日本葉書会」となるところです。会員たちが「相互気脈を通じ意思の疎通を謀るがために」この雑誌は便宜を図ります、ということを「会則」でうたつていて、言ってみれば、絵はがき交換会がそのまま雑誌を出してしまつたというような格好です。会が置かれた住所を見ると、「東京市小石川区久堅町百八番地」となっています。一般の方はわからないと思いますが、これは、じつは『太陽』などを出していた当時の大出版社博文館の印刷工場があった場所です。

ですから、私が想像するに、恐らく「日本葉書会」は博文館の別動隊であり、当時の流行に乗って、読者を手つ取り早く獲得するチャンスだと思つてこのような雑誌を作つたのではないのでしょうか。



図⑩ 『手紙雑誌』中、「広瀬中佐夫人宛ての手紙」を募集している頁。明治37年(国文学研究資料館蔵)



図⑪ 『手紙雑誌』の「繪葉書交換會」の趣旨。明治三十七年(同)



図⑫ 『ハガキ文学』創刊号表紙。明治三十七年(同)

会員からの投書はどのような種類のものでも受けつきたよう、論文、写生文、叙情文、書簡文、批評文、新体詩、和歌……など、ありとあらゆるものがオーケーだとうたっています。

『ハガキ文学』の第一号には窪田重式という人の「絵葉書論」という文章が載っており、絵はがきの効用を六点ほどにまとめています。「言いたいことを書きだすと長くなるが、絵はがきであれば、あまり字を書くところがないので、短く済ませられる」とか、いろいろなことを言っています。私が注目するのは、効用の一つとして「親愛、友愛」をうたっていることです。「親愛、友愛、其他種々様々の情緒を美的に永久に保存し得ること」、すなわち人と絵はがきを交換することで、親しい交遊の思い出を美しい記念として永久に保存できるということです。先ほども言いましたが、当時の人びとには「趣味をベースにしたインテリメートな人間関係を希求する」心性が強かったです。これを見ると、絵はがきがそうした役割を担っていくものとみなされていたことがよくわかります。

明治版「出会い系サイト」

『ハガキ文学』が絵はがき交換を始めるのは明治三十八年からで、その方法は、こんなものでした。たとえばある人物が、「望む、交換」などと書いて、自分の住所と名前を挙げます。すると、それを見て興味を持った読者が、交換しようと言ってはがきを出すわけです。

このように説明しただけで気づきの方もあると思います。先の『手紙雑誌』は編集部が「お見合いの仲人」のように読者と読者の間を仲介したわけですが、この『ハガキ文学』は、「読者同士のダイレクトなコミュニケーション」のための掲示板のような場であったわけです。

このやり方は非常に反響を呼び、ある読者は、投稿したらたちまち五百通ぐらいはがきが来たと言っています。この投稿者は「想像だけでも」と言いながら来状を分析していて、「学生諸君が六分で、実業家の道楽らしきものが二、三分、その他、画家、エビ茶式部(女学生)もしくは令夫人(身分の高い奥様)も少しは混じっているのだ」とのことです。

じつは、この絵はがき交換では、女性と称しながら、じつは男だったという例もあったようです。ときおり、「許し難い」として誌上で暴露されているのを見かけることがあります。なぜそんな詐欺まがいをしたかという、絵はがきはけっこう高額だったので、多く集めると商売ができたようです。今日でも絵はがきコレクターの方はいらっしやいますが、当時はブームだったのでお金になったのです。

この様子を見て思い出すのは、現代のネット社会です。不特定多数の人間が、この場合は趣味ですが、趣味という共通項を介して出会いを求めていく。見も知らぬ相手に想像を膨らませて、期待して、手紙を出してみる。そして、ときにはだまされる。ちょうどネットの出会い系サイトとあまり変わらないような世界が、ここに現出し

ているのです。

もう一つ、絵はがき交換をしていた女性の例をお話します。彼女は大の絵はがきマニアなので『ハガキ文学』に交換の広告を出してみたそうです。広告の文言は、「絵はがきをかへてくださいいな おしろいくさいのかへしますよ」。ほとんど現在のネットの世界と同じです。これを出したところ、来るわ、来るわ、一日に百枚以上来たそうです。ところが、「ろくなものがなかった」そうで、

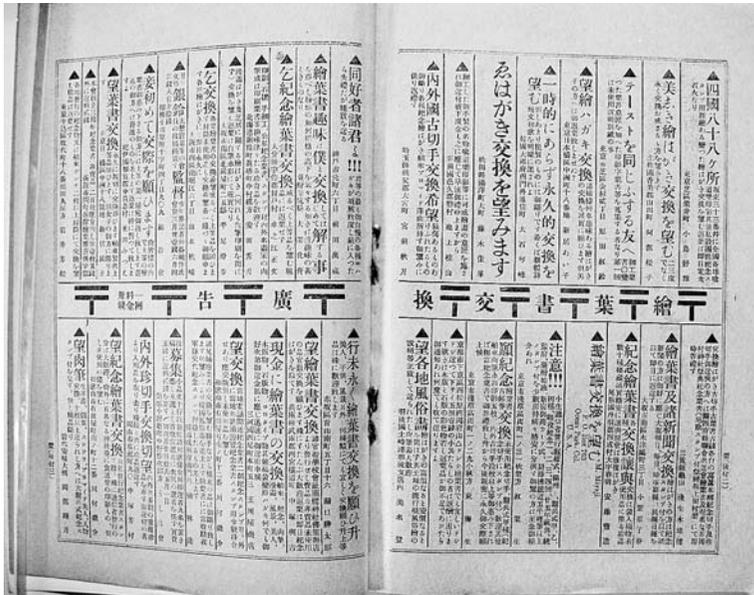


図10 『ハガキ文学』中、「絵はがき交換」の広告の頁。明治40年(国文学研究資料館蔵)

頭に来て、『ハガキ文学』にその不満を投書します。

何が頭に来たかというところ、とにかく文字が汚い、書式が乱暴、形式がまったくなっていない。絵はがきは日本人固有の色紙や短冊に書くような形式で書くべきだと言っています。また、文章が平凡なものもいけないそうです。「交換希望」などと無風流なことを書いてはいけないと言っています。

また、もともとこの人が「おしろいくさいのを返す」などと思わせぶりなことを言ったのがいけないのだと思いますが、恋だの、ラブだのと書いた猥褻なはがきもけっこう来たそうです。自分はあばずれ女ではないのだから、そのようなことを書くなと言っています。

絵はがき交換なので、ただ絵はがきを交換すればいいのではないかと気がします。しかし、彼女はそれでは不満なのです。では、何を書けばいいかというと、「おのが境遇の一部、山水風景の有様、地方の出来事、時事問題、または詩歌、俳諧、川柳などを美的に書く」べきだそうです。こうしたものなら、「永久に興味を持って子孫に残すことができるだろう」と彼女は言っています。絵はがき交換というのは、単に絵はがきをモノとして交換するのではなく、そうした趣味的なものを交換することに意味があるというわけです。

さまざま欲望がうごめく場所

さて、その後「絵はがき交換」はどんどん発展していき、

やがて交換するものはがきだけではありません。「はがきとお金との交換希望」（すなわち買い取り）、「はがき以外のモノの交換希望」、あるいは単に「交換希望」など、ありとあらゆるものが載ります。ここに、明治四十年四月号の「絵葉書交換広告」の頁を挙げます（図⑬）。雰囲気をご覧ください。

「テーストを同じふする友へ」というキャッチコピー風のものもあります。「絵葉書趣味は僕と交換してはじめて解する事」と自分の志の高さをアピールしているものもあります。「妾初めて交際を願ひます」という女性からの交際希望もあります。「現金に絵葉書の交換」というのもあります。毎号いろいろなバリエーションがあって、見ているとそれぞれに面白いものです。

挙げはじめるときりがありませんが、この他にも、新聞・雑誌の交換、自作俳句の交換、写真の交換、内外切手の交換、あるいは不要になった書籍の交換などがあります。また、「キッスカード」などという怪しいものもあつたよううで、女性が自分でキスした絵はがきを交換しましょうという露骨な広告も堂々と活字になっていたりします。

風変わりなどころでは、「文学会を設立したので、会員いくらでご入会あれ」と会員を募っているようなものまでありました。おそらく、こうした雑誌の読者が集まって、いろいろなところで緩やかなサークルのようなものが作られ、そこからまた新しい雑誌を作る動きが生まれたりしたのでしょう。明治版のはがきネット社会は、そうしたものがリンクしてくる場でもあつたということなのです。

形のあるものないもの含めてさまざまなものが交換され、そこにいろいろな欲望がまわりつき、人が集まったり離れたりする。そのような場所として、「絵はがき交換会」は進展していったのだと思います。

では最後に、「絵はがき交換」ブームの集大成として面白い例を挙げます。『ハガキ文学』の明治三十七年十二月号に、『明治青年文士録』という本の広告が載っています。絵はがき交換の広告を集めたような単行本だったらしく、広告には「青年文壇の大偉観」だとか、「青年文士交際の絶好機関」などがあります。たぶん「紳士録」と同じようなものを作ろうとしていたのでしょう、氏名、雅号、住所等を明記して、文章、詩歌、俳句など、自分が得意とするところも書いてどんどん送ってきなさいとあります。そうすれば、私たちのほうで県別に分類して青年文壇の状況が一目でわかるような名簿を作ってあげますとのことです。

ところが、この『明治青年文士録』は探してみてもいっこうに出てきません。国立国会図書館等にもありませんので、多分、結局刊行されなかったのではないかと思います。

しかし、こういうものが企画されるほどに、明治三十年代から四十年代にかけて、人びとの間にはがきを介したコミュニケーションが行われ、そこにさまざまなものがまわりついて、一つの文化が現出してくるような状況が存在したわけです。

五味 どうもありがとうございます。ネット社会の原型が百年前にもう現れていたという、非常に興味深いお話でした。パソコンや携帯電話の普及によって人間社会は非常に進歩したと思っていました。案外、どこまで進歩したのかよくわからないという気になりました。

次のご報告は、東京大学大学院助教授のロバート・キヤンベル先生です。先生はかつて国文学研究資料館にも在籍しておられました。アメリカ生まれですが、生粋の日本人といえるくらい、日本の近世・近代文学に造詣の深い方です。

漢文で綴られた 日本の“手紙”

「手書き」の文章へのいとおしみ

皆さんにたつぷりと長い手紙をお出しするような発表をしたところですが、手紙どころかはがき、いや、Eメールぐらいの時間しかありませんので、かいつまんでお話をすることをお許しいただきたく思います。

いまの谷川恵一さんのお話の中で、「子孫に残せるような趣味のよいはがきを書きましょう」という面白い言葉がありました。江戸時代から明治にかけての日本の文芸

資料を見ると、出版物はもちろん非常に多いのですが、手書き、つまり自筆の資料も多く見られます。日本では、他のアジア諸国、あるいは欧米に比べて、実際に人が手で書いたもの、人が誰かに何かを伝えようとしてじかに書きつけたものを大事にする伝統があります。そして、その思いをくみとつて、大切に保存していく文化が長く存在してきたと思います。

今日、これからいくつかの手紙を実際に読んでみたいと思います。私たちのように江戸から明治にかけての文

ロバート・キヤンベル

(東京大学大学院・助教授)

学を勉強している者は、いつも先人が書き残してくれた資料、後世の人びとが大事に保存してくれた資料に囲まれて仕事をしています。それは私たちにとっては日常的な風景です。

今回のシンポジウムは「手紙」がテーマですが、最初に五味文彦先生がおっしゃったように、手紙というのは手で書くものであり、身体的なものです。手紙というのは人間の生身の肉体とともかかわり深い存在ではないかと思っています。

私が日本に移り住んでから二十数年になります。日本にやってきた当初は、国際電話はまだKDDの独占でした。料金も非常に高く、故郷のニューヨークに電話をかけると一回で二万円くらいかかってしまいます。留学生の身ではとても無理ですので、故郷の人たちとのコミュニケーションはもっぱら手紙でした。こうしてやりとりした手紙は捨てがたく、下宿を引っ越すたびに、いつも一つのダンボール箱に詰めて移動させたものです。ところが、あるとき飼っていたネコがトイレの砂箱と間違えて(笑)、だいなしにしてしまいました。

捨てようかどうしようかと迷ったのですが、しのびないので、夜中に誰もいないコンビニに行き、全部コピーして写しをとったのちに処分しました。いまでもそのコピーを見るとにおいがしてくるようです(笑)。

ともあれ、人が実際に手でつづり、自分の意思や気持ちを人に伝えようとしたものはなかなか手放せないものです。私をそういう気持ちにさせているものが、私が江

戸時代の文学をずっと勉強してきた理由でもあるのかもしれない。人が一所懸命手で書いたことには、読むほうも共感できるという気がします。

「儒者たちの「漢文」と「候文」

先ほどの十川信介先生も「言文一致」に否定的、あるいは懐疑的でしたが、私の報告も、多少共通するところがあります。というのも、私は感情をもろに表すことが特徴の言文一致体とはまったく対極にある、「漢文」のお話をするからです。

漢文は日本の文章の中でもっとも形式ばったもので、とりわけ明治以降は古い時代の因習を代弁するものとみなされるようになりました。とはいえ、十八〜十九世紀の江戸時代、また明治に入っても明治十年代くらいまでは、日本の知識人の多くは漢文をコミュニケーションのツールとして用いていました。ちなみに、維新期までの漢学者を儒者とも呼びます。

とはいえ、儒者たちが漢文で日常の用をすべて足していたかという点、そうではありません。江戸時代の標準表記として、普通の手紙にはやはり「候文」を使っていました。儒者の候文というのは面白くて、ふだん漢文で書いているときの肩の力が抜けて、かなり自由にいろいろなことを書いてみせます。みずからの思考、あるいは身辺で起こった出来事、個人的な思い、お願いごとなどを比較的思うままに書いています。候文の手紙がなければ

ば、江戸時代の思想家たちの日常がどのようなものだったのか、いわば「思想のゼロ地点」は恐らく見えてこなかっただろうと思います。

そのようなことで、これから順番に、儒者の候文の手紙と漢文の手紙を見ていただきたいと思います。

漢文でつづられた手紙が、当時の知識人の全体的な営みの中でどのように位置づけられていたのか、漢文で書かれたものと候文で書かれたものとの間にはどれくらいの距離があったのか、また、ある人に何かを伝えたいとき、漢文と候文のどちらが言いたいことをうまく言えたのか、あるいは、どのような場面でのどのような文体がふさわしかったのかといったことが見えてくればと思います。

なお、今回は幕末の手紙に絞ってお話いたします。次に発表してくださる宮地正人先生がおそらく幕末周辺のお話をなさるので、それとリンクしてくればいいかと勝手に希望しております。

師と門人の候文のやりとり

では、まず儒者の候文の書簡として資料①②を挙げます。東條琴台とうじょうきんだいという人が書いた手紙です（明治初期の写し、『東條琴台書牘』所収）。

東條琴台は当時七十歳くらいの老人で、江戸で育ち、文化・文政のころには詩人として、雑学者として、文壇でたいへん名声を上げました。下田歌子の祖父でもある、知る人ぞ知る存在です。天保の改革の後には洋学、とく

に海防に興味を持ち、日本の地図を勉強したり、海外情報をいろいろと手に入れたりして、たとえば伊豆諸島の詳しい地図を絵師に書かせ、自然風土などを考証した文章を地図の周りにぎっしりと漢文で書き込んだ『伊豆七島図考』というものを出版しました。ところが、これが一八五〇年にお上の咎めを受けて発禁となり、住み慣れた江戸を追われて越後高田藩の城下に謫居となります。生粋の江戸の文人だった人が、以後十八年間も雪国で過ごすことになるのです。

こうして、彼は非常に不本意な日々を小さな城下町で過ごすわけですが、そこでなりわいとして行ったことは、高田を中心として越後、越中、あるいは北陸全体の弟子たちに、文通で教育することでした。いわば通信教育です。身柄を拘束されて一つの場所から動けない状況にあった学者が、若い弟子たちに一〇〇パーセント文通で通信教育を行ったという例は、江戸ではなかなか見当たりにません。非常に珍しい例だと思います。

一方、手紙の受取人のほうは逸見文九郎へんみぶんくわうという弟子で、越中高岡の人間です。彼の家はいわゆる素封家で、江戸でいうところの「札差ふださし」のような存在でした。若いときから蘭学に関心を持ち、家業を続けながら勉強し、幕末にはとくに京都で活躍している志士たちを援助し、みずからも国事に奔走しました。素封家の活動家のような人です。

この手紙は、幕末に地方に追いやられた江戸の情報通、最先端の知識人が、江戸とのパイプを使いながら、地方

……兼て御頼之拙著絶板被仰付『七島図』一部江戸へ申遣し、最初ニ摺込之品にて様々遣しけれ、偽板出来にて贋物は二朱より八匁五分位にて御座候得共、此品は十七匁五分申来候。一分御散財可被下候。源白石『采覧異言』『西洋紀聞』之両書、先年拙生校正の本転展して、写本仕入候もの売物として世に行れ申候。是も書肆にては格外ニ、二十七部禁書同様にて表向ニ売買ハ相畏れ、容易ニ一ト通りにてハ商ひ不申。寛永中祇教嚴禁之事、御承知之通り文章公御明断にて白石右ニ書呈し候より耶蘇事歴も相分、当時之人蘭学と唱へ候もの全く是をはじめと致候事ニ御座候。様々ニ取寄のミニて中はまだ一覽不申、写本誤字多と被存候。拙生序跋とく御説可被下候。是も甚以高価にて、以前ハ六冊ニ綴ぢ分一兩位に売買申候。何卒二分一朱御散財可被下候。内実は相成丈け減じ申候様申入候得共、彼是往還之諸費は不申候て、右之仕合に御座候……

資料① 逸見文九郎(舩斎)宛・東條琴台書簡写。文久2年(1862)月日未詳。金沢市立図書館蔵『東條琴台書牘』所収

の若い人たちにどのように知識を与え、あるいはみずからの学問的な営為をどのように成り立たせたかという面白い文献資料です。儒者の候文の手紙としては本音が出ていますか、非常に愉快です。こういう文献でしかわからないような面白い発見がたくさんあります。琴台は、江戸の知人を介して玉岩堂という書物問屋からいろいろな本を買い、それを教科書として弟子たちに回覧させました。買ったというと語弊がありまして、琴台にはお金がほとんどなかったので、まず見積もりを取り、弟子たちからお金を集めて買い、それらを回覧させたわけです。

……蘭学之一事、今横文を説候ものは十二年文化文政之頃より倍して工者ニ相成、以前より訳訓之法も甚以捷徑ニ走り可申候。佐久間修理など松代先侯(割註・老中御勤之方)、蘭学は皇国之学を致し候もの、加茂真淵・本居宣長が遺著之写本調候とも大凡二百金ニ足らずして、六国史はじめ購ひ得可申。漢学は十三経註疏・五経大全より十七史弘簡録付か四朝別史付等より立廻り之字典類函等購ひ候共、百五十兩之金あらば其人之氣根と精究次第にて一儒者となるべし。蘭学は(ハルマ、ガラマンチー)之二書をはじめとして皇国の後藤点の四書五經之素読同様之所にて、七八十兩も無之候ねば、中々容易ニ学び可申様無之、ざつとして五百金之儲へ無之候ねば、最初ニすら取掛り兼候て、三四年之内にて地理・航海・天学・星曆より物産・本草・医術・算数・器械・製造・兵法・火技・究理・分理之諸術ニは蓋し千金之出費無之てハ、手を下し兼候と、其君ニ申上候。其君御申ニは、寡人、衣食を節約して一ケ年二百兩ツ、遣し可申とて、第一二三百兩を賜はる。此よりして修理、長崎奉行へ頼で蘭人持渡り之書買得候……

資料② 逸見文九郎(舩斎)宛・東條琴台書簡写。元治元年(1864)12月23日着信。金沢市立図書館蔵『東條琴台書牘』所収

資料①は、そのような琴台の手紙の部分抜粋です。この中で、まず発禁事件を起こした自分の作品に触れています。「兼て御頼之拙著絶板被仰付『七島図』一部江戸へ申遣し、最初ニ摺込之品にて様々遣しけれ、偽板出来にて贋物は二朱より八匁五分位にて御座候得共、此品は十七匁五分申来候」。『伊豆七島図考』の板木は没収されてすでにないはずなのですが、その海賊版(偽物)があると言っています。海賊版が出回って売買されているとい

うことは、人気があったというか、需要がかなりあったということ。琴台はそれを取り寄せると言っているのですが、これは一種のアンケラの行動になります。

この手紙を読んだのちに、私は『七島図』をあちらこちらで見てもわかったところ、やはり二通り存在していました。どちらが本物で、どちらが偽物かということはこの文章から推定できませんでした。

また、「源白石『采覧異言』『西洋紀聞』之両書、先年拙生校正の本転展して、写本仕入候もの売物として世に行れ申候。是も書肆にては格外ニ、二十七部禁書同様にて表向ニ売買ハ相畏れ、容易ニ一ト通りニてハ商ひ不申」とあり、これもまた興味深いことを書いています。新井白石の『采覧異言』『西洋紀聞』は、とくに後者にはキリスト教の教義が非常に詳しく書かれていますので、国禁に抵触して、江戸時代には絶対に出版することはできませんでした。ところが、琴台はその写本を自分で作っていたのです。それをみずから暴露している、というよりも自慢しているような文面になっています。

このように、彼は弟子たちにもいろいろな学術情報を教えています。新井白石は当時としては新しい人ではありませんし、『伊豆七島図考』もいまから見れば不正確なものではありますが、北陸あたりの若い人たちにとっては非常に重要な情報の一つだったに違いありません。

続いて②の手紙は、元治元年、ちよと逸見文九郎自身が京都の禁門の変に引つかかって下獄する年でもあります。蘭学をどのように勉強していくかということ

匠自身が伝えた内容です。江戸の幕末の学芸について、あるいは実際に何かを学ぼうとする人の視線といったものが非常によく表されています。

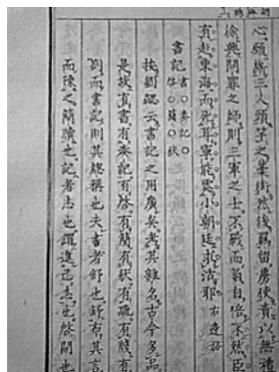
ここには、佐久間象山さくま しょうざんが自分の主君の真田幸貫まなだ ゆきつら(松平定信の次男)に対して蘭学の手ほどきをしたときの話が引かれています。面白いのは、それぞれの学問にかかるお金の話です。「国学」を勉強するなら二百両。すなわち、賀茂真淵や本居宣長の遺著の写本がだいたい二百両ぐらいで買え、一通り基本的なツールを手に入れることはできるそうです。「漢学(儒学)」になると少し安くなつて、百五十両です。百五十両あれば、性根をすえて一所懸命勉強すれば、儒者になれるということ。

そして「蘭学」に関しては、相当裕福な人でなければ学べないといえます。蘭学、洋学に関してはいろいろの本が多く、値段も高い。写しも貴重なのでなかなか買えない。儒学でいうところの『四書五経』のように、十歳から十三歳くらいの子供が使うような基本的なものをそろえるだけでも、蘭学の場合は七十〜八十両ぐらいかかる。ざっと五百両くらいなければ学問に取りかかるともできず、さらに専門に進んでいこうと思つたら千両くらいは必要と言っています。このように佐久間象山が真田侯に話したところ、真田侯は「では自分は毎年二百両ずつ節約して、あなたに遣わそう」と言つて、さしあたり三百両くれたとのこと。

この佐久間象山のやりとりを琴台が弟子への手紙に書いたことの意味するところは、ちよとと言ひ方はよくない



図① 『文体明辨纂要』表紙と「書記」の部分



のですが、富裕な門人をその気にさせると言いましょうか、学問は物入りであることを理解してもらいたい、もっとたくさんのお金を買ってもらおうとしているわけです。

このように見えてきますと、儒者の候文で書かれた手紙というのは、対他関係がはつきりしています。この文章の場合は師から弟子（パトロン）へという型ですが、もちろん、パトロンから師へという逆の方向性もあります。琴台はこの人にかなり支援してもらっている関係にあり、書簡集をずっと見ていくと、学問の上だけでなく、実利（実際の生活での利益・不利益）の面でも、二人が非常に深く絡み合っていたことを生々しく知ることができます。

ちなみに、東條琴台という人は高田にずっといて、自分の研究を続けながらたくさん著述をなしましたが、読者の身なので出版はできませんでした。これが実現して後半生の著作が世に出るのは明治維新の後です。

書記

……書記の用広し。その雑名を考ふるに、古今品多し。是の故に書有り、奏記有り、啓有り、簡有り、状有り、疏有り、牋有り、劄有り。而して書記はその総称なり。夫れ書は舒なり。その言を舒べ布いて、これを簡牘に陳するなり。記は志なり。謂ひは己の志を進むるなり。啓は開なり。その意を開き陳ぶるなり。一に云はく、跪なり。跪いてこれを陳ぶるなり。簡は略なり。言ひはその大略を陳ぶるなり。或いは手簡と曰ひ、或いは小簡と曰ひ、或いは尺牘と曰ふ。皆、簡略の称なり。……秦漢以来、皆親知・往来・問答の間に用ふ……

ものごとを正確に簡潔に伝える「漢文」

続いて、漢文の手紙に参ります。当時の文人にとって、文体としての手紙、あるいはジャンルとしての手紙は非常に重要で、たいへん鋭く意識されていたろうと思います。

漢文で書かれた手紙は普通手紙とは言わず、「書牘」「尺牘」などいくつかの名称で呼ばれていました。いまここに挙げていますのは『かんたいめいぶんせんよう文体明辨纂要』という本です（明治十一年版、資料②、図①）。宋、明の時代まで、さまざまな名家たちの文章のサンプルを挙げて、ジャンルや文体別に分類しています。そして、どのような内容のときにもどのような文体で書くか、また、文章というものはどのようなべきかといったことを解説しています。漢文

資料② 『文体明辨纂要』巻上「書記」の項目。明・徐師曾編、大郷穆抄録。明治11年(1878)年、東京刊(原漢文)

の文体の手鏡のようなものです。江戸時代に十数回再版され、私が確認したところでは、明治時代にも三つ、四つぐらいのバージョンがあります。

この中に手紙について解説した「書記」という項目があり、それを読むと当時の考え方がよくわかります。「或いは手簡と曰ひ、或いは小簡と曰ひ、或いは尺牘と曰ふ。皆、簡略の称なり。……秦漢以来、皆親知・往来・問答の間に用ふ」などと言っています。

儒者たちは手紙というものを特別な存在として意識していたわけではありません。特定の人に自分のある意思なり、気持ちを伝える文ということであれば、手紙書簡)になりえたのです。ですから、当時の儒者にとっては、私たちがエッセイと呼んだり、ルポルタージュと呼んだり、あるいは政策にかかわる公用文書、公文書と呼んだりしているスタイルの文章と「手紙」とは、切り離せないものでした。あるいは切り離さないものとして存在しました。

儒者というのは人びとにものを教え、善導し、あるいは感化する立場の人です。他人を教化することを使命として持っているわけですから、ものごとを人にきちんと伝え、きちんと理解してもらうことが非常に重要です。ですから、日本の江戸時代の学者、あるいは明治の学者たちもそうですが、彼らは若いときから、ものごとをできるだけ正確に、簡潔に相手に伝える訓練を受けました。いま挙げた『文体明弁纂要』もその訓練をする教科書のようなものとして考えていただいていたというのです。

「漢文の寓話スタイル」をとった手紙

では、漢文で書かれた手紙を挙げます。資料④の「送袁虫仙子序」という文章を見てください。

これは、正確には手紙ではありません。物語のような文章です。どうしてこれを手紙と認定して例示するのか不思議に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、いまお話したように、日本の儒者たちにおいては、たとえばエッセイや記録文のようなものと手紙とは不即不離の關係にありました。そして、誰かと交わした言葉や対話、問答などを漢文で書き記して、その人に送るという習慣がありました。ですから、手紙らしからぬ文章が、ときとして手紙的な役目を果たしていたのです。これもそのような漢文の一例です。

これを書いた人は明治時代に初期の東京大学の教授として非常に有名だった南摩綱紀なんまつなりのりという人物です。元会津藩の藩士で、幕末には蝦夷に六年間滞留し、非常に見聞を広めました。このような自筆草稿が所収されている本は国文学研究資料館が所蔵しています。彼は自分の文章が一箇ずつでき上がってくると、菊池三溪きくちさんけいや頼山陽らいさんようの孫、江馬天江えまたんかうなど、友人である文人たちに回覧し、添削してもらったり、批評を書き込んでもらったりしました。当時どのような文章がどのような形で書かれ、周りの人間たちにどのような形で読まれていたかを語ってくれるたいへんいい資料です。

送蓑虫仙子序

涼窓別燭草地志、苦不得諸国風土山川物産里程之詳、展諸書校之、窓外有人、短衣蓬髮、飄然而来云蓑虫仙也、自叙其履歷曰、余年十四觀蓑虫而有感、乃遊四方、拾収群虫繭、數百千不啻、推而及産物、古器・書画、又推而及山川・人物・風俗、里程、或為田家螟子、或為海戸漁夫、或庵於寺而飽蔬筍、或廬於山而餐煙霞、或遭罵、或下獄、而依然不變素志、朝拾暮収、拮据二十余年、棚載所獲而歸、將築六十六庵、分各州品物列之、使人坐庵中而遊六十六州、聞知達材、以進日新之域也、其貌野其言弁、而其志確、引滿笑談、聲驚四隣、余頗奇之、勸之詳記諸州山川・風土・物産・里程、且曰、勉於初而怠於終、進於壯而退於老、亦人之情也、必也如張旭於書而後可能遂其志也、韓子嘗稱旭之喜怒窘究天地事物之變一発之書、以送浮屠高閣、今蓑虫之事、雖或不同而其確志貫初終、果能駕閑而至旭之域、則其庵与記之成可期也、蓑虫臨去、乞言乃書所共語贈之且以勉之、

南摩綱紀

(涼窓に燭を別り地志を草するも、諸国風土・山川・物産・里程の詳を得ざるに苦しみ、諸書を展じて之を校す。窓外に人有り、短衣蓬髮、飄然として来りて云ふ、「蓑虫の仙なり」と。自ら其の履歷を叙べて曰く、「余、年十四にして蓑虫を觀て感有り。乃ち四方に遊び、群虫繭を拾収し、數百千も啻だならず。推して産物・古器・書画に及び、又た推して山川・人物・風俗・里程に及ぶ。或いは田家の螟子と為り、或いは海戸の漁夫と為る。或いは寺に庵して蔬筍に飽き、或いは山に廬して煙霞を餐す。或いは

資料④ 南摩綱紀「送蓑虫仙子序」自筆稿本(定稿)。明治4年(1871)成立か。国文学研究資料館蔵「南摩綱紀文稿」所収

罵に遭ひ、或いは獄に下り、而して依然として素志を変へず。朝拾暮収、拮据すること二十余年、獲る所を棚載して帰る。將さに六十六庵を築き、各州の品物を分けて之に列し、人をして庵中に坐して六十六州に遊び、知を開き材を達し、以て日新の域に進ましめんとするなり」と。其の貌は野、其の言は弁、而るに其の志は確なり。引滿笑談、声は四隣を驚かす。余頗る之を奇とし、之に諸州の山川・風土・物産・里程を詳記せんことを勸む。且つ曰く、「初めに勉むるも終りは怠る、壯に進むも老いに退く、亦た人の情なり。必ずや張旭の書に於けるが如く、而して後に能く其の志を遂ぐ可きなり。韓子、嘗て旭の喜怒窘究、天地事物の變、一に之を書に発するを稱し、以て浮屠高閣に送る。今蓑虫の事、或いは同じからずと雖も、而して其の確志初終に貫き、果して能く閑に駕して旭の域に至れば、則ちその庵と記との成るも期す可きなり。蓑虫去るに臨み言を乞ふ。乃ち共に語る所を書して之に贈り、且つ以て之を勉む。

南摩綱紀

「送蓑虫仙子序」の内容は、ある日、綱紀の家の前に非常に不思議な男が現れ、その人と話をしてみるとたいへんな奇人であったというものです。

その男は十四歳のとき蓑虫みのむしという虫を見て、目から鱗が落ちたそうです。そこでいろいろなところに出かけていって「群虫繭を拾収し」、とにかく何千種類もの虫を集めはじめました。それが発展して、今度は出かけていった先々の産物・古器・書画、いろいろなものを収集するようになった。こうして三十五歳になるまで集めまくって、彼の家はいまで言う「ゴミ屋敷」のようになりました。

彼はみずから「蓑虫の仙」と称しています。

当時の日本は六十六州といわれましたので、彼はそれを分類して、六十六の部屋を作り、集めたものを陳列しました。話を聞いた綱紀はこれはすごい人だと思って「あなたの見聞を詳しく記述しなさい」と勧めます。ところが蓑虫の仙は非常なる奇人ですから、そんな面倒くさいことはできないと言って断るわけです。

最後のあたりに、「去るに臨み言を乞ふ」とあります。お互いに意気投合して会話をして酒を飲んで、別れ際に、蓑虫の仙が言葉を乞うたのです。これに対して、「乃ち共に語る所を書して之に贈り、且つ以てこれを勉む」とあって、先ほど申し上げたように、綱紀はこのときの会話を書き取って贈りました。二人の間で交わされたコミュニケーションを一種の寓話のように書き起こして、相手にあげたわけです。

この出会いが寓話的に仕立てられていることには理由があると思います。蓑虫の仙はおそらく一般社会にはあまり順応できないような奇人です。しかし、そのような人がある一面においてたいへんな異能を発揮することがある。とくに、一つのことにごだわり、そこへのめり込み、その道を極めていくという点においては学者としての自分とも共通点を感じたのかもしれない。そこで、そのような彼の姿勢を褒め称えるために一種の儒者の言説のような形に仕立て上げたのではないのでしょうか。

このように、少し門戸を広げて江戸時代の漢文学者たちが書いたものを見ていくと、当時の漢文がじつに多彩

で、多様なあり方をしていたことを発見できるのです。

私は最初にこの文章を読んだとき、全部作りごたろうと思いました。しかし、この書物には二つ、三つほどの書き換えのバージョンがあり、いちばん早い段階のものを見たところ、実名が書いてありました。「美濃安八郡結村 土岐源吾 大垣ノ東一里 洲股^{すまた}周辺」とあり、無名の人物でしょうが実在の人物のようです。多少脚色しているかもしれませんが、事実に基づいた話です。

江戸時代から明治初期にかけては、われわれがいまとらえている手紙の形以外に、このようなコミュニケーションのあり方も一つの形として存在していたわけです。

ちょっと落ちどころがありそうでない蓑虫の話でしたけれども、儒者たちの「候文のコミュニケーション」と「漢文のコミュニケーション」を一度横に並べて考えてみたいと思っていましたので、今日の発表はその試みをさせてくださいというところで、終わらせていただきます。

五味 ありがとうございました。儒者の手紙には何が書かれ、何が意図されていたのか、その一端が伝わってきました。固そうな世界ですが、儒者の手紙を研究することの楽しさを教えていただいたような気がします。

次に国立歴史民俗博物館の前館長で、現在、東京大学名誉教授の宮地正人先生をご紹介します。申すまでもなく、幕末・明治維新の歴史研究の第一線に立つておられる方です。よろしく願います。

政治家の手紙

平田国学者を糸口として

宮地正人

(東京大学・名誉教授、
国立歴史民俗博物館・名誉教授)

国内的経済発展と 手紙の時代の到来

鎖国体制下において、従来の領主階級中心の全国経済から、民衆を軸とした全国経済に大きく転換していくのは、十八世紀後半からのことです。製糸や絹織物の主要生産地の上州や奥州郡山・福島・桑折などの地域に一七七〇年代、三都飛脚問屋が定期便体制を確立したことは、この新しい事態を象徴する出来事でした。

全国的な経済的取引は、頻繁で確実な手紙の往復システムの成立によってのみ保証されます。このような経済活動から産み出された情報伝達制度を前提とし、そのネットワークに依拠しながら、手紙による社会的・文化的な全国的交流もすっかりとしたものに成長していったのです。歴史的に位置づければ、「手紙の時代の到来」と表現することができるでしょう。

気吹舎の活動には
なぜ手紙が必要となったのか？

平田篤胤・養子鍔胤・嫡孫延胤の三代にわたる学術活動の場は、江戸での学塾気吹舎においてでした。その活動は一八〇〇年代の零年代から開始します。内容は、一方で日本の古代研究(彼らはそれを古道学と呼んでいました)、他方で儒教色・仏教色を完全に払拭した復古神道という新しい考え方の普及でした。門人・支持者は全国的に存在しています。

学問に関する質問は手紙でなされ、初期の門人の多くを占める神職たちは、寺院の束縛から脱するためにも、自分たちの奉仕する祭神の、儒仏色を排除し記紀神話を根拠とした由来、自分たちの奉仕する神社の古代での淵原を手紙で問い、またそのための文献と研究指導の教示を求めます。神道を自立させようとする意欲、在地の名望家としての神職の職業知識と、祝詞の書き方をはじめとする職業訓練への旺盛な要求は、十九世紀初頭からの彼らの顕著な傾向となります。

丁寧な回答し、求められた文献を飛脚便として郵送する気吹舎(この実務は鍔胤の担当でした)にとっては、全国の門人と支持者は、貴重なパトロンでもありました。

数多の篤胤の学術的・復古神道的著作を一つ一つ出版していくための資金助成者となってくれるからです。

在地の知識人としての門弟・支持者は、しばしば訪れるイカサマ師匠・山師たちをあしらうなかで、その学問がホンモノかニセモノかを見抜く眼力をつけていた人びとばかりでした。そのような力量ある「こわい」門弟・支持者と気吹舎の篤胤・鍊胤との間には、次第に情誼共同体的関係が成立していったのです。

ペリー来航後の 気吹舎の性格転化

この気吹舎と全国の門弟・支持者たちとの関係が政治的色彩を帯びるのは、一八五三年のペリー来航を契機とします。仏教の祖国インドは大英帝国の植民地となり、武士階級の精神的・倫理的根拠となっていた儒教の祖国大清帝国はアヘン戦争によりイギリスに大敗し、領土を割譲させられました。その欧米列強が日本に開国を迫るに至ったのです。

命を賭してその独立を守るべきわが日本を成り立たせているものは何か？何を根源的価値として死守しなければならぬのか？この段階に入ると、気吹舎の門人・支持者は、従来の国学愛好家や神職の枠をはるかに超え、武士階級が平田国学に目を向けるようになります。

日米和親条約締結の一八五四年より西郷隆盛は再三にわたり気吹舎を訪問しますし、一八五五年に多くの福岡

藩士と福岡藩神職の気吹舎への入門を仲介する人物こそ、後日生野の乱で捕縛・獄死する平野国臣ひらのくにおみだったので。

このような事態になると、以前の学術・宗教運動の発信基地気吹舎の活動は、次第に政治的色彩を帯びてこざるをえません。江戸の政治情報を地方に伝える機関となつていき、逆に各地方からは、京都をはじめ、各地・各藩での政治情報が江戸の気吹舎に報ぜられてくるのです。

気吹舎と平田国学がさらに政治的色彩を強め、神職や武士階級のみならず、全国の豪農商に影響力を持ちはじめるのは、一八五八〜五九年のこととなります。一八五八年三月二十日、孝明天皇が日米修好通商条約案を勅許しないと声明し、無勅許のまま、幕府はやむなく六月十九日にハリスとの間で調印し、激怒した孝明天皇は八月八日、幕府の措置を難ずる密勅を水戸藩に下し、これが直接の引き金となつて、九月より安政大獄という二百数十年間絶えてなかった大々的な政治弾圧が全国的に展開します。

ここに、日本の国家意思は誰が決定するのか、自分はこの問題をどのように判断し対処すべきなのか、全国的、より具体的には武士階級以外の地域政治を担う豪農商層に鋭く提起されたのです。

平田国学と風説留

ところで、政治情報の頒布はんぷは、死刑という極刑に処せられる可能性を持っていたものでした。しかも、この政

治情報をいかにして収集するかが、政治に関心を有する全国の人びとの課題となってきたのです。それを、幕府以外では、藩域を超えてもつとも包括的に蓄積できる組織に気吹舎はなっていました。それほど全国各地との手紙の往復が多かったのです。手紙によって報ぜられた情報の蓄積が「風説留」と呼ばれるものとなるのです。

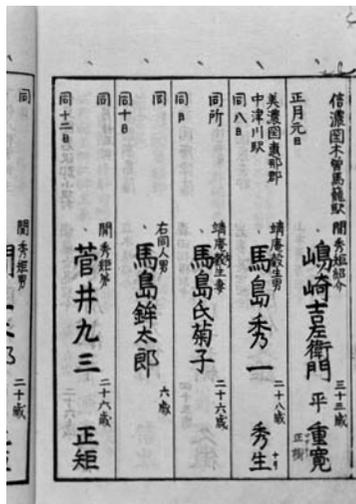
現在、佐倉の国立歴史民俗博物館の「平田家資料」の中には、気吹舎が一八五三年以降蓄積した風説留の大部の冊子が存在していますし、関西の平田国学者のまとめ



図① 平田延胤編集風説留『形勢聞見録』
平田延胤が気吹舎で入手した政治諸情報を整理・編集したもの。正編10冊(嘉永6～元治元年)、追加4冊(嘉永6～慶応3年)、附録10冊(寛政5～元治元年)の計24冊。ただし各種の延胤秘密日記にある情報は入っておらず、両方とも併せ見る必要がある(国立歴史民俗博物館蔵)

役ともいえる江州近江八幡の国学者西川吉介も膨大な量の風説留を作成しつづけ、現物は現在、彦根の滋賀大学経済学部図書館で閲覧ができます。また『夜明け前』の歴史的舞台、草莽の国学の一つの本拠地となった美濃中津川(馬籠は最近中津川市に合併されました)の中山道歴史資料館には、浅見景蔵の名前で小説に登場する中津川本陣の市岡殷政が記録しつづけた部厚い風説留十冊が寄託されています。

さらに、鍔胤と延胤は秋田藩士にもなっていたので、



図② 門人姓名録
「授業門人姓名録」とも呼ばれているもの。全6冊。第1冊は1804年(文化元年)の最初の入門者から、篤胤生前の最後の入門者までの入門年月日、紹介者、諱名などを記したもの。第2冊から6冊は没後の門人の姓名録で、最後の入門者は1872年(明治5年)9月入門(同)



気吹舎で収集した政治諸情報は秋田藩当局に逐一報告されていきます。残念ながら現在のその原本は所在不明ですが、戦前、文部省維新史料編纂事務局が写した抄本が、「風雲秘密探偵録」と題されて、今日、東京大学史料編纂所に所蔵されているのです。

政治活動と政治的見解

ただし、事は政治情報のレヴェルにとどまらなくなっ
ていきます。平田国学の基本的な政治的立場は、天皇を
中核とし全国の豪農商を政治的基盤とする、外圧に屈し
ない強力国家の形成をめざすものであったので、その立
場は親長州・親薩摩とならざるをえず、そのような政治
的意見と見解が手紙の中に表明されることになるからで
す。それは気吹舎からの発信と、全国の門弟・支持者か
らの来信の双方に含まれることとなります。

とすると、経済的な情報ネットワークとしての営業的
飛脚制度だけを利用することは、政治情報の報知以上に
きわめて危険なこととなります。飛脚便では信書の秘密
はまったく守られてはいないからです。ここにおいて気吹
舎の手紙の流通は二重構造をとることになりました。

①それほど危険ではない内容については、従来通り各
種の飛脚便が利用されますが、②幕府の手に入ってはま
ずい内容の各地の手紙、あるいは気吹舎からの手紙は、
門弟・支持者が江戸に来る機会に、彼らに托せられるこ
とになります。

一例を挙げると、横田藤四郎という平田門人は、武田
耕雲齋こううんさいの西上勢に加わり、一八六四年十一月二十七日、
中津川で一行が昼休みをとった際、信州和田峠で戦死し
た十八歳の息子の首を中津川の同志に托して埋葬・葬儀
を依頼するとともに、郷里の野州真岡宛ての手紙の伝達
を頼んだのです。中津川の同志は、誠実に埋葬と葬儀（二
〇〇六年の今日まで十月二十日の命日には墓前祭が毎年
挙行されています）をとりおこなうとともに、安全な方
法でこの手紙を江戸の気吹舎に送り届け、鍍胤は真岡の
人が気吹舎に来た際に、彼の手紙を托することになるの
でした。

③このような政治状況になってくると、誰が安心して
手紙を托し、あるいは安心して政治の話をすることがで
きるか、ということを確認する必要がある発生してきま
す。各地の平田国学の代表的人物は、従って、「気吹舎門
人帳」の写しを江戸の気吹舎に作成するよう頼むことと
なります。しかし、毎日のように入門者がいるので、各
地の人びとは自分の手許に何年何月の何の何右衛門まで
の写しがあるので、それ以降の写しを送るようにと依頼
するのです。これが各地に「気吹舎門人帳」の写しが現
存している理由なのです。私は広い意味での「党員名簿」
だと位置づけています。

手紙と政治。パンフレット

しかしながら、政治運動というものは、政治情報の交

換、政治的意見・見解の伝達というレヴェルにとどまることはありません。「政治綱領」ともいべき近未来への大きな見通しと、それへの政治的接近の論理に関する著作物、別の表現では「政治パンフレット」（英語では pamphleteer という作成者を示す言葉まであるようです。さすが、政治的伝統のある国らしい重みのある語彙ですね）というものが、運動の中で産み出されていきます。気吹舎でも、この政治論理は貫徹していました。

とくに、孝明天皇が一八六五年十月五日、欧米連合艦隊の大坂湾進入と軍事的脅迫に屈し、結局条約を勅許した直後より、万国対峙を可能ならしめる今後の国家形成をいかにすべきか、という見通しと方法論が著作物の形として必須となります。平田延胤の書いたパンフレットは「馭戎論」と題され、全国の有力門人に手紙とともに郵送され、薩摩藩士には江戸で直接手交されることとなるのです。

明治維新と『復古論』

一八六八年の王政復古による幕藩制国家の解体と維新政府の登場は、政治と手紙の関係のあり方を大きく転換させることとなります。維新政府は、情報の流通を阻止し禁圧するのではなく、情報を広く普及し輿論を政府の側に組織・誘導することをきわめて明確に意図した新しい型の国家権力となります。その象徴的なあらわれが、一八六八年二月に政府によって創刊される「太政官

日誌」と呼ばれる newspaper であり、その後政府当局者により続々と刊行される各種雑誌となるのです。

平田国学も当然、この新しい政治潮流の流れに棹さします。『明治文化全集』雑誌篇に収録されている、草莽の視座から明治維新の必然性を説いた維新論の傑作と評されている『復古論』なるものは、大政奉還の直後、秋田藩主に王政復古の必然性を説得するため、平田延胤が執筆した藩主宛て上書に手を加え、京都において木版摺りで一八六八年に刊行されたものだったのです。

手紙の時代から新聞・雑誌の時代へ

政治という公然とした言論による党派形成のため新聞・雑誌が登場したとき、政治と手紙の関係は、あまりに見事に変化します。とたんに手紙がその輝きを失うのです。政治情報は「太政官日誌」を見ればよく、政治的見解は新聞の社説と新聞への投書に表明されるようになります。さらに、政治的な見通しとその運動論は雑誌論文の形に姿を変えます。これからの訴える相手は、不特定多数の顔が見えない一般大衆となってくるのです。

手紙では、語りかける熟知した特定の個人と集団があり、相手の健康への問いかけが行われ、受け取り手の家族への挨拶と思いやりが述べられ、最近の政治的事件への個人的感慨と憤り、あるいは手が舞い足が踊るような歓喜が語られ、その中で政治情報が報ぜられ、政治的見

解が表明され、さらに政治パンフレットが同封されました。この手紙とパンフレットは手紙を受け取った人物の周辺にただちに回覧され、写され、風説留の中に綴り込まれていったのです。このような全国各地の政治活動家の主体的で上下関係のない対等な関係のあり方は、明治に入るとおのずからその姿を変えていくこととなります。

これは近代という政治社会が形成されていく過程での歴史的必然なのであり、また生身の個人の生活と社会と政治とが渾然一体となって表明されることで、その強烈な魅力を発揮しえた「政治書翰」の可能性が消滅する歴

史的必然でもあったのです。かくして、「政治における手紙の時代」は、その終焉を迎えました。

五味 ありがとうございます。幕末・維新期における政治の情勢と手紙との係わり合いを簡潔に、的確にお話していただきました。

次のご報告は安田常雄先生です。安田先生は国立歴史民俗博物館の教授で、目下、近代・現代の展示について一所懸命模索されているところです。よろしくお願います。

マッカーサーへの手紙

安田常雄

(国立歴史民俗博物館・教授)

「日本の戦後」を考える手がかり

今回、現代史の中で手紙について発表してほしいという宿題をいただき、いろいろ考えた末に、戦争直後に日本の人びとが占領軍司令官であったマッカーサーに宛て

た手紙についてお話をさせていただくことにしました。なぜならば、それらの手紙は、「われわれ日本人にとって戦後とはいったいどのような時代であったのか」という問題と、非常に密接に絡んでいるからです。マッカーサーへの手紙を取り上げながら、日本人の「戦後」の問題との接

点を考えてみたいというのが趣旨です。

日本がアメリカに占領されていた一九四五年から一九五二年までに、多くの日本人がマッカーサーに手紙を書きました。その数は約五十万通といわれており、とくにアメリカのマッカーサー記念館と、ワシントンのナショナル・レコード・センターに保存されています。その全容はまだ明らかになっていません。彼自身が気に入って持ち帰った手紙が三千五百通ほどで、その中のほんの一部が日本の国会図書館に返還され、マイクロフィルムでいくらか見られるようになった程度です。研究もほとんど緒についたばかりです。

五十万通といえば膨大な数です。現代史の中でも、一度そこに入ったら一生出てこれないだろうといわれているくらいで、なかなか踏み込んでいきません。そういう恐ろしい世界です。ただ、これらの手紙の数々をどのような形で位置づけていくかは、なかなか面白い試みではあります。

マッカーサーへの手紙でとても重要なのは、それらの中に占領期という時代が持っていたさまざまな論点がかかる凝縮して表れていることです。たとえば政治問題、社会問題などです。これがまず第一点として重要だと思えます。そして、手紙ですから当然それを書いた人がいるわけで、その一人一人がその時代をどう生き、どのような状況に向き合い、どのような状況の中で書いたのかということが第二点として重要です。ですから、マッカーサー宛ての手紙では日付がとて重要で、

そんなことを考えながら、私が一つ思い出すのは、「人は忘れてしまったことに復讐される」という言葉です。マッカーサー宛ての手紙は、まさにこれを伝えていていると思います。戦後六十年たつて改めて、日本人とは何だったのだろう、あるいは戦後の日本とは何だったのだろうと考えるときに、一つの重要な手がかりになりうると思うのです。

手紙に見える十タイプの類型

まず、手紙資料について説明します。手紙の数は推定五十万通と先ほど申しましたが、これには根拠がありません。当時のGHQには、「GS」という日本の憲法を作った組織と、「GII」という諜報関係のセクションがあり、そのGIIの傘下に「ATIS」という翻訳通訳部隊がありました。ここにマッカーサーに宛てられた手紙についての記録があるのですが、それによると、一九四六年九月から五〇年の末までに、約四十一万八千六百六十通の手紙が届いたということです。占領の開始から一年ほどが欠如しているのですが、プラス十万通くらいであろうと推定し、一九五一年初めから四月のマッカーサー解任までの四か月間についてはあえて計算に入れないとして、現代史の研究者は約五十万通と言っているのです。

この五十万通は、基本的にはすべて国民が自発的に書いた手紙です。じつは終戦直後、例の「一億総懺悔」という言葉を作ったことひびくこのみで知られる東久邇宮内閣のとき、

国民に「ぜひ皆さんの意見を聞きたい」という呼びかけをして投書を募ったのですが、ほとんど効果はありませんでした。そして、一九四五年の十月に東久邇宮内閣は崩壊してしまいます。

そして、一九四五年十月の「毎日新聞」の記事に、マッカーサー元帥への投書が一月に三百通あったと書かれています。ですから、このころからマッカーサーに手紙を出す人がそろそろ出はじめたようです。記事を読んだ人たちも、「自分も手紙を出していいのだ」という気分になったでしょう。なんとなくそのような感じが漂っていたのが、一九四五年の秋ごろの状況だったのではないかと思います。

さて、マッカーサー宛ての手紙は膨大な数ですが、いくつかの類型に分けて考えたらどうかと思います。私はとくに「マッカーサーへの手紙」を専門に研究しているわけではないので、ここでの基本資料は、袖井林二郎さんの労作『拜啓 マッカーサー元帥様』に依拠して部分的に紹介し、また類型についても、袖井さんの分類をベースに、私なりに組み替えてお話しすることにしたと思います。

すなわち、A・身をすりよせた勝者へのもたれかかりの手紙、B・招待の手紙、C・占領者への直言の手紙、D・天皇と天皇制に関する手紙、E・「やさしい父親」としてのマッカーサーへの手紙、F・贈り物の手紙、G・政策提言の手紙、H・「解放軍」と反共主義の相克、I・さまざまな願い事の手紙、J・占領の終結と今後の展望の手紙、以上です。

この類型に沿って、ごく一部ですが、具体的に手紙をご紹介します。なほ、手紙の選択についてはもつとも主題を鮮明に表現しているものを選びました。

勝者へのもたれかかり、招待の手紙

まず、類型Aの「身をすり寄せた勝者へのもたれかかりの手紙」です。

たとえばある手紙には三つほど論点があります。一つは戦争の責任は国民にあるということが比較的明確に書いてあることです。当時の全体状況としては、責任は軍閥、財閥など軍国主義者にあるという考えが大勢を占めていたのですが、この人は「国民の愚かなりしたためと軍閥に勇敢に抵抗せざりし自業自得の罪」と書いています。このような発想は、当時は多くなかったらうと思います。

二つ目は表層にある「国体護持」という台言葉の底に、もう一つの民衆のホンネが隠されている。「天皇制問題の如きは二の三のごさいます そんなものはどうなつてもよいと考へて居ります それよりも一日も早く復興が出来て生活が安定することをのみ望んで居ります」と言っています。これは、この手紙に限らず当時の多くの手紙に共通する、いわば「戦後の初心」のようなものです。

もう一つは、「米日合併」という提案をしていることで、

これがこの手紙のいちばんの眼目です。「私は周囲の人々と論じて見ました 彼等は皆望み得べくんば若し事情が許されるなれば日本の国の全すべてのを貴国に託して貴国の御賢明にして宗教的なる御指導を仰ぐ 即ち米日合併をして頂いてこのおぼれる日本国を救つて戴けることが出来たなら日本国民は如何程幸福であろうかと皆異句同音に切なる望み願望を懐いて居ります これは偽らざる事実でございます。いまから見るとたいへん奇異ですが、当時は多くの文学者の提言の中にも米日合併、日米合併という考え方が見られ、必ずしも珍しい意見ではありませんでした。戦後六十年たつてなお従属を独立と勘違いしているようないまの状況からすれば、日本をアメリカ合衆国日本州にしてくれというような主張は、むしろきつぱりと明快に見えたりします。当時の状況が非常によくわかる資料だと思えます。

この人はもう一つ、「もしアメリカが日本を救ってくれないなら、日本は共産主義制度へと進んでゆくべく余儀なくされるだろう」というようなことも言っています。このような言い方も当時は非常に多く、ある意味では「弱者の恫喝」、またある意味では「庶民のしたたかさ」といえるかもしれません。この手紙は類型Aの基調となるようなニュアンスを持っています。このように、類型Aは勝者にもたれかかりながら、お願い事をしているようなタイプです。

次に、Bの類型で、「招待の手紙」です。これも非常にたくさんあります。たとえば戦前からの農民運動家が終

戦祝賀民衆大会をやるのでぜひ来てほしいと言ってみたい、鎌倉の鶴岡八幡宮の宮司が源実朝の記念祭のようなものをやるのでご招待したいと言ってみたいしています。ちなみに八幡宮のお祭りでは、茶会をやり、生け花をやり、静御前の舞をやり、面白いことに、藤原義江のテノールが入り、「元禄花見踊」も披露しますとあります。マッカーサーがそこに行つて見物している図などを想像するのたいへんおかしいのですが、そのような招待の手紙がたくさん残っています。

「私は入間川のほとりに住む一介の漁夫であります。毎日川へ出漁して鮎と鰻を獲つて暮しております」というような庶民からの手紙もあります。このような庶民が、マッカーサーに「いちばん鮎がおいしい季節なので、来ていただけないだろうか。わが方では独特の獲り方をして、その場で鮎を焼いて賞味するという長い間の習わしがあります」と招待しているわけです。

文章の中には、マッカーサーは「私達が長年月血みどろになつても成就出来なかつたものを、日本及び日本人のために」やってくれたと書いてあります。おそらく地主小作関係にかかわる小作争議など、戦前から戦つてきた農民運動のことだろうと思えます。いずれにしても、そのような地域に住む庶民が率直に感謝して、招待の手紙を出している。こうしたものが代表的なタイプと考えただければと思えます。

占領者への直言

続いて、類型Cに行きまして、「占領者への直言の手紙」です。

一九四五年九月一日というたいへん早い時期に出された手紙があり、差出人は東京丸の内の国際平和協会のタニモトさんという人です。どのような組織であったのかはよくわかりません。

この協会はメンバーに向けて、「マッカーサーや占領軍に望むことが何かあったら提出してください」という呼びかけをしたようです。それに対して返ってきた回答の一つを「こういう抗議がありました」と引用して、マッカーサーへ書き送ってきているわけです。

抗議をしているのは女性で、「私共の家は二度も焼夷弾攻撃の目標となり、ついには焼かれてしまいました。広島にいる私の妹は原爆の犠牲となり、行方不明となっています」という状況だそうです。そして、戦時下なら不平は言わないけれども、戦争が終わったいまでも米軍の飛行機が毎日頭上を飛び交い、その爆音に非常に悩まされていると訴えています。

この状況はさまざまな資料に散見されるのですが、米軍のB29は、戦争が終わった後も、民家の屋根すれすれの超低空を飛んでいたようです。沖縄の普天間飛行場の様子を思い浮かべていただければと思います。だから、「せめてもう少し高く飛んでもらえないだろうか」と言っており、最後のところで、「どうぞ米軍機が畏れ多い

宮城の上空だけは飛行いたしませんように」と結んでいます。

先ほど日付が重要と言いましたが、一九四五年の九月一日というと、ミズーリ号甲板での講和もまだ行われていません。マッカーサーも来たばかりです。ですから、ほんとうに戦争が終わってホヤホヤの状況なわけですが、早くも自分たちの今後の生活に直接かわるものとして、占領軍のさまざまな問題についての抗議がこのような文章として残されているわけです。

当時の占領軍や米兵の行状に対する抗議文は他にもたくさん残っています。たとえば、一九四五年十月二十日付で、台東区浅草の女性が、アメリカの兵隊が女湯をのぞいていた、そんなことをしているのかと叱りつけるような手紙を書いています。日本は敗戦になったとはいえ、日本の出陣した若者の中には「人としての反省矜矜持をもち風雅の中に喜び楽しみをも」った誇り高き人間がたくさんいた、女風呂をのぞくように本能のおもむくままに生きていた者ばかりではないと、痛烈に書いた手紙です。多分マッカーサーは苦い顔をしたと思います。その他、東京裁判に対する批判や占領政策に対する批判の手紙などもあります。

続きまして、類型Dの「天皇と天皇制に対する手紙」です。天皇と天皇制をどうするかは、一九四五年の日本にとつては愁眉の課題であり、このタイプの手紙は非常に多数に上ります。これと関連するのが、ちよつと先に飛びますが、類型Hの「『解放軍』と反共主義の相克」で、

共産党および共産主義にかかわる手紙です。

この二つの問題は当時の社会状況、占領期の日本を考えるうえで大きな対抗軸となりますし、非常に細かいいろいろな議論があります。本来なら例となる手紙を挙げてお話ししたいのですが、今回は時間の関係上、カットさせていただきます。

やさしい父親としての マッカーサー

次は類型E、「やさしい父親」としてのマッカーサーへの手紙」というタイプです。ご存じの方も多いと思いますが、文芸批評家の江藤淳氏が、父性としてのマッカーサーという観点から日本の戦後文学史を整理されています。その論点ともかわるような種類の手紙がたくさんあります。

このカテゴリーで一つ私が注目したいのは、「マッカーサーの子供を生みたい」という女性からの手紙が、数百通もあったといわれていることです。これは先ほどあげた袖井林二郎さんの『拝啓 マッカーサー元帥様』という本の中に出てきます。当時GHQのGIIセクションで手紙の翻訳や記録などの仕事をし、のちにカンザス大学の先生になったグラント・グッドマンという人がいるのですが、その人が実際にそのような手紙をたくさん見たということなんです。

残念ながらそれらは公開されていないので、具体的に

どのような手紙だったかはわかりません。が、グッドマンさんは「Father Child Relationship」という表現でとらえています。そして、袖井さんはそれらの手紙が、日本占領の本質をよく表すのではないかとのことです。こう書いています。「私はそれらの女性を軽蔑しようなどとは思わない。彼女らは女としての本能を、正直に勇敢に表しただけなのである」。袖井さんの表現によれば、「日本占領とそれに引き続く諸改革の実施」は、ある意味では「少なくとも多くの庶民にとっては、いわば強姦ではなく和姦であった」。これが彼のイメージです。

この点については日本の現代史研究者の中にもいろいろな見解があり、この表現が日本占領の本質をすべてつかまえているのかどうかは明言できません。それも一つの見方ではありますが、今後議論すべき問題の一つでしょう。

いずれにしても、マッカーサーを父親と見るということには、日本の戦後を覆っているある種のメンタリテイの、スタートラインのようなものが描かれていると申し上げてもいいだろうと思います。

贈り物の添え状

続いてFの類型は「贈り物の手紙」です。

マッカーサーのもとには手紙とともに膨大な数の贈答品が届けられました。たとえば女性が「組立大和スタンダード一張り」を贈ったり、少女が「お人形さん」をプレゼ

ントしたり、老人が「黒絲緘鎧」一着を贈呈したりして
います。「ステッキ」はものすごい数にのぼったというこ
とです。ある医療技師は、自分が発明したという「アメ
リカン・スタイル腹帯(ベリーバンド)」なるものを贈り、
ある会社専務は自分の会社で作ったという「魚粉と小麦
粉」で作ったビスケットを贈り、アイヌ新聞の代表者は「熊
の毛皮」を贈りました。「面白いものからかなり怪しげな
ものまでありますが、ともあれ、皆それぞれに工夫を凝
らしてマッカーサーにプレゼントをしたわけです。新しい
憲法が公布されたことを喜んで、新憲法の全文を両面に
書いた扇子を贈った人もいました。

そのようななかで、ちょっと注目したいのは、広島に
住む衣川舜子さんという女性が、自分の書いた『ひろしま』
という本をマッカーサーに贈ったときの手紙です。時期
は一九四九年八月です。自分の著書の『ひろしま』の第
一章を自分で英語に翻訳して、マッカーサーに読んでもら
いたいと送ったのです。

これを見ますと、「貴方は私がなぜ敢えてこの『ひろし
ま』をさし上げるのか、不思議に思われるかも知れません。
しかし私は、広島に住民としての真情をわかっていただ
きたいというだけで、抗議するなどという気持は全くあ
りません。私の願いはごく単純です。日本とアメリカの
両国民が広島に住民の訴えを分って欲しいということだ
けです。／貴方は原爆とそれをもたらす悲惨な損害につ
いて、聞いたり話したりすることを不快に思われるかも知
りません。私もお話をすることを忍びがたく思います。し

かしそれは事実であり、誰も否定することは出来ないの
です」とのことです。

じつは、この手紙はのちの一九八〇年代半ばごろにかな
り注目を集め、新聞を手始めにテレビ局も興味を持って、
ドキュメンタリーも作られました。そのなかで、衣川さ
んという女性がどういう方なのかということもわかって
きました。

東京新聞・中日新聞の編集委員だった林茂雄さんが書
いた『マッカーサーへの手紙』(図書新聞社、一九八六)は、
手紙を書いた人びとの戦後をも追った興味深い本です。
それによると、衣川さんは一九二二年、名古屋市の生まれ
です。その後、東京に移り、府立第五高女から東京高等
師範(現在のお茶の水大学)を卒業した後、広島私立の
高等女学校の国語の教師をしていたところ、爆心地から
一・二キロのところまで被爆された。その被爆の体験が『ひ
ろしま』という本になって、一九四九年七月に刊行され
たのです。その後は逗子に移ってずっと高校の先生をさ
れ、そのかたわらで広島に関するさまざまな歌もお作り
になったそうです。

いくつかあげておきましょう。

「願わくは 即死であれかし 六千度の

一瞬の業火 まともに浴びて」

「ひたひたと 寄る潮のごと 街を焼きし

けむりは谷を 這いのぼり来ぬ」

政策提言の手紙

では、類型Gの「政策提言の手紙」に参ります。これにもじつにさまざまなものがあります。資料は挙げませんが、二つほど代表的な例を紹介します。

一つは奄美出身者による「奄美大島を早く返してください」という奄美返還の進言の手紙です。ご存じのように奄美大島はかなり早く、占領終結一年後の一九五三年十二月に返還されました。国民からの手紙がきっかけとなって返還されたわけではありませんが、要望の手紙はかなり書かれているようです。

奄美返還がなぜ早く実現したかという点については、現代史研究者はいくつか理由をあげています。一つはアメリカにとつて奄美は沖縄ほど戦略的価値が大きくなかったということ。もう一つは、奄美は戦前から強固な社会運動の伝統がありますので、それへの対応に苦慮したこと。そしてもう一つ、奄美を返すことによつて沖縄の占領永久化を実現する。いわば沖縄とのある種のバスターです。そんな取引のような構造の中で奄美返還が実現されます。これが国際政治のリアル・ポリティックスなわけですが、手紙を見ると、そのようなところにつながっていくものを感じさせます。

もう一つの例は「沖縄復帰請願」の第一号の手紙です。当時本土にいて復帰請願をやっていた沖縄のエリート層の手紙で、日付は一九五〇年九月三十日です。たとえば、「もしアメリカの真意が、沖縄を『戦略地域』に指定する

ことにあるのならば、日本領土の一部のままでも沖縄を戦略的に使用することは十分に選択の余地があるはずで」と書き、「アメリカ軍に積極的に協力する決意」を示そうとしています。林さんの本によれば、元衆議院議員、元貴族院議員、歴史学者、高級官僚、企業家などが名を連ねています。一九五〇年九月といえれば朝鮮戦争が始まって二か月後で、このとき沖縄は国連信託統治領に編入されるかどうかという問題に直面していました。これについて非常に強く抗議をしています。一日も早く本土復帰を実現し、「信託統治下の沖縄ではなくて、日本の主権下にある沖縄に軍事基地を設置」することを願うというアンビバレントが特徴です。

さまざまな願い事の手紙

類型Hは先ほど申し上げたので省略して、類型Iの「さまざまな願い事の手紙」に移ります。

例として、まず「アメリカに行きたい」という手紙を二つ紹介します。一つは十三歳の少女の手紙です。「日本は戦争に負け本当にみだれし国となって居ます 此の日本を良くするためにわ私達の熱心や心の美しい親切希望がなければ日本はまだく悪くなるでしょう そして平和国家と文化国家を作らなければなりません(中略)私の家は学校も行けないほど苦しい家です けれども此の家をたてなをすならば勉強が第一です/私渡米してアメリカで勉強して日本え立派な人となって国の役に立つような

人になって此の世をさりたいと思ひます(中略)どうか渡米させて下さい お願ひします」。もう一つは「渡米許可嘆願の件」と題した女性の手紙で、文体は先ほど十川信介先生がお話になっていた候文です。服飾の勉強をしたのでアメリカに行かせてくれと訴えています。最後のあたりに「米国の優秀なる服飾文化を紹介宣伝して萎靡沈衰せる生活文化の水準昂揚と併せて文化日本の新建設に貢献せんとするものに有之候」とあります。趣旨は同じようなものですが、文体が対照的なので、まったく手紙としての趣が違っていて、興味深いものがあります。

また、当時の保守党政政治家の何人かが、朝鮮戦争が始まった直後、義勇軍を作つて朝鮮半島に行きたいと請願した手紙もあります。もつとも代表的なのは、当時、和歌山二区から選出された保守党代議士の世耕弘一という人が百万の義勇軍の設定を訴えたもので、後にロッキード事件で有名になる右翼の児玉誉士夫も「自分も兄弟と一緒に行って戦いたい」と書いています。本当かどうか疑わしいのですが、朝鮮半島のことはアメリカ人よりも日本人のほうがよく知っているからという共通の論理のようです。

そして、願ひ事の手紙の中でもう一つ注目していただきたい例があります。橋光子さんという女性が書いたたいへん痛切な手紙です。

「マッカアサ司令官閣下にお願ひ申上げます 他の事でも御座居ません(中略)実は此の度比島ルソン第一收容所にて死刑執行日を待ちて居る橋政雄の妻でございますが

どうか他のお願ひではありません 主人此の世の別れにたつた一言のお願ひでございますのは 昨年一月一日男子出生も知り申せず現在に及びまして男か女か存じないのでござるます 本年正月過ぎに便り致しましたれど未着の様子にござるます 名前もノリヲと命名致し一目我子も見せたいのは山々なれど如何とも致しがたく せめてお頼みのマッカアサ司令官閣下の御茲(慈悲で死刑前)にノリヲ出生の事 後つぎは屹度立派にノリヲにさしますよう/桜花と散ります橋政雄への贈り物と思召し特にお許し下さいましてお知らせ下さいませ」。

要約すると、彼女の旦那さんは憲兵で、フィリピンのルソン島の收容所に入れられていて、死刑執行日を待っているのです。ところが、一九四五年一月一日に男の子が生まれ、名前も憲雄とつけたのですが、そのことを夫はまだ知らない。だから赤ん坊のことを伝えてもらえないだろうかという手紙です。

この手紙も先ほどの衣川さんと同じく一九八〇年代半ばごろに大きな反響を呼び、テレビのドキュメンタリーになりました。林茂雄さんの本によると、彼女は朝鮮で生まれ、朝鮮の女学校を卒業後、高知県に戻り、香川の善通寺の憲兵分隊にいた夫と結婚しました。夫は長女が生まれた後の一九四四年秋に出征し、その翌年の正月に長男の憲雄さんが生まれるわけです。そんな矢先に、夫がB級戦犯としてルソン第一收容所に收容されたという便りが届きます。記録によれば、当時橋政雄はマニラ憲兵分隊付准尉で「マニラ周辺地区の肅清に伴う現地人殺害

及び許容」の罪であったといえます(坂邦康編『比島戦とその戦争裁判 惨劇の記録』(東潮社、一九六七)。BC級戦犯です。

BC級戦犯については現在でも不明なことがたくさんあり、なかには無実の罪で亡くなった人もいます。この件についても真相はよくわかりませんが、ともあれ奥さんは一九四六年四月六日付で手紙を書いて、マッカーサーに出しました。戦後の回想によれば、「その時の衝撃がどんなものか、とてもお話できません。ただ憲雄の件だけは、どうしても主人に知らせてやりたいと思いました。そんなこと、かなうはずもない、それに敵の大將にこんなことをしては、と迷い、悩みました。結局、ワラにもする気持で……。でも、届いていたんですね、マッカーサー元帥に」(林茂雄、前掲書)。しかし、マッカーサーに宛てられた手紙は、翻訳されたり、要約されたりしてから本人に渡るので、その手紙が実際にマッカーサーの手に届いたのは一か月以上も後の五月九日のことでした。

マッカーサーはこの願いをかなえてあげると参謀長に伝えたと言われている、直筆のコメントも残されています。ところが、じつはそれより以前の三月十八日に現地で軍事裁判が行われ、夫は四月十一日に処刑されてしまっていたのです。ある意味で、ほんの一步、すれすれのところで悲劇となってしまったわけです。

このように、さまざまな戦後の人間ドラマのようなものが、マッカーサーへの手紙の中には深く内在していると

私は思います。

占領の終結にかかわる手紙

では、最後の類型J、「占領の終結にかかわる手紙」に移ります。

ここで例として紹介する手紙は無署名ですし、要約が残されているだけです。原文がどのようなものだったのかも、誰が書いたのかもよくわかりません。ただ、これを読んでみると、いわば、日本における「正しい民族主義者」といいますか、その主張のようなものが、ある意味でかなり鮮明に描かれています。

手紙の冒頭ではアメリカ占領軍の行状、犯罪等々についてかなり強い言葉で抗議しています。これが本当にデモクラシーなのかとマッカーサー元帥に問うています。「日本人は自宅を接収されても、女房や娘が暴行されても、一言でも抗議の声をあげることは許されない。壁新聞を一枚貼っただけで五年の強制労働なのだ。これがデモクラシーというものか。マッカーサー元帥よ。こんな状態で日本人が自由を享受しているなどと、あなたは本気で考えているのか」。また、この人は「君に忠」「親に孝」という観念を信じているわけです。そして、米軍の日本占領がうまくいったのはたまたま偶然だったと言います。「広島・長崎へ原爆を投下したアメリカの惨虐行為に日本人は怒りを燃やしたのだが、スターリンの行なった凶行への怒りがそれにまさったのであり、アメリカは運がよかつ

たと思うべし」。この人は、戦前の日本軍隊の指揮官が中国や満州で現地住民が抱く根深い反日感情を理解できなかったことを的確に指摘しながら、アメリカもその二の舞を演ずるのかと問うているのです。

これは当時の全体状況からいえば、先ほど申し上げた児玉誉士夫といったような系列の右翼とも違うし、当時のいわゆる左翼の言説とも違います。もちろん沖縄の犠牲を許容し、日本国土の防衛を「アメリカとかくも勇敢に戦った我が国の愛国者たちにまかせよ」という我田引水は問題ですが、独特のスタンスの民族主義者の主張であることは確かです。占領軍にはつきりとモノを言う民族主義者はほとんど稀なのです。

この手紙を見ると、この人が言うような心情、メンタリティは、戦後六十年間ずっと日本人の底流に存続しながらも、なかなか表面化しなかったのではないかという気がします。戦後の長い年月を通して、総合雑誌や新聞等々にも明確に書かれたことのなかったスタンスだと思います。

戦後日本の民主主義を どうとらえるか

マッカーサーへの手紙の十の類型を紹介し終えたところで、まとめとして、これらの手紙をどのように評価するかについて少し触れたいと思います。

まず、二つ目です。こうした手紙資料に関してよく出

てくる見解の一つは、ステレオタイプ的に「日本人とはこういうものだ」とみなす一種の日本人論です。日本人の国民性とは「群集心理」「状況追従」であり、しかも「民衆意識」は絶えず風見鶏、そして日本人の中にある「指導者の権威を敬う心性」などの指摘があります。これもある意味では当たっているわけですが、現代史研究としては、それだけではすべてを説明しつくしていないのではないかという気がします。たいへん難しい問題です。そして、袖井さんもそうした心性は長い封建社会の時代に、人びとが村落共同体の小宇宙の中に閉塞されてきた結果として形作られたのではないかと言われます。しかし、本当にそうなのか、よく考えてみる必要があります。

二つ目は「戦後」というものの複雑さに関する問題です。当時も、あるいはいまも、戦後というものが語られるときは非常に単純化して語られます。批判する側も擁護する側も同様です。養護する側は、戦後を原理主義的に単純化する傾向があるし、批判する側は自分で勝手に非常に単純な戦後像を作っておいて、そこをたたくという構造になっています。しかし、日本の戦後は本当にそのように単純なものだったのか。戦後、占領時代に日本が持っていたさまざまな複雑な性格、両義的性格と言ってもいいですが、そのようなものをきちんと見ることが重要だろうと思います。

たとえば「民主主義」というものにしてもそうです。一口に民主主義と言っても、第一には「拘束された民主主義」という側面もありますし、第二には「帝国主義的な

民主主義」という側面もあります。現代史研究では、こ
 十年ほど東アジアにおける日本占領とは何だったのか
 ということが重要なテーマなので、今後そうした論点が
 たぶん浮上してくると思います。そして第三には、これ
 はアメリカの研究者が提起した言葉ですが、「いわゆる天
 皇制民主主義（インペリアル・デモクラシー）」をいったい
 どう考えるか。日本占領というのは多元的な意味を持ち、
 ある意味では両義的で、振幅を含んだものであったと思
 います。そのあたりを考えることが課題だと思います（ジ
 ヨン・W・ダワー「解説」、袖井林一郎『拝啓 マッカー
 サ―元帥様』岩波現代文庫所収、二〇〇二を参照）。

そして、三つ目に考えたいのは、「戦後の初心」という
 問題です。先ほども述べたように、当時の手紙に共通し
 ているのは、「旧指導者に対する根底的な愛想づかし」、
 いままでのやり方ではもうだめだという思いです。それ
 は全体を通して非常に強烈に表れています。軍国主義者
 だけではなく、保守党政治家も含めて全部そうでした。
 そこから、日米合併しかないだろうというような意見も
 出てくることになるわけです。そのように、当時の人び
 とが痛烈に抱いた思いを、いま改めて見直してみる必要
 があるのではないかと思います。

最後に、作家の小林信彦さんが書いた「サモワール・
 メモワール」というたいへん面白い小説に触れて終わりと

いと思います（『発語訓練』新潮社所収、一九八四）。これ
 はある種のパロディ小説で、もし日本がソ連に占領され
 ていたらどうなっていただろうというテーマの小説です。
 当時、ソ連とアメリカの分割占領案というのはありまし
 た。早期につぶされたので、現実には起こらなかった
 けれども、もしそれが実現していたら、という小説です。

そうなっていたら、明治神宮は「レーニン宮」、表参道
 は「ウラジミール通り」なんていう名になっていたでしょ
 う。若者はコサック・ダンスに興じ、進駐軍のソ連兵の
 服装などもファッションになって、戦中派の眉をひそめさ
 せていたでしょう。ソ連の大衆文化もかなり取り込まれ
 て、シベリア帰りの民衆芸術家・三波春夫先生はレーニ
 ン勲章をもらっているし、検閲体制も厳しいのですが、「バ
 イカル子守唄」とか、「モスクワだよ、おっかさん」など
 の歌が大ヒットしていただろうという小説です（笑）。

この小説の最後に主人公がつぶやきます。「私は、も
 し、三十七年まえに、日本がアメリカ軍に占領されてい
 たら、と考えた。……それは、あり得ないことではなか
 ったのだ。だが、もしも、そんなことが起っていたとしたら、
 私たちの生活はどうなっていただろうか？ いまより不
 幸になっているのは、まず確かであろうか……。問題は
 そういう形で構造化され、この六十年を貫いてきたよう
 に思います。

人は、どんな手紙を書いたか——近代日本とコミュニケーション

パネル・ディスカッション

パネリスト

十川信介

(学習院大学・教授)

ロバート・キャンベル

(東京大学大学院・助教授)

宮地正人

(東京大学・名誉教授、
国立歴史民俗博物館・名誉教授)

安田常雄

(国立歴史民俗博物館・教授)

司会

谷川恵一

(国文学研究資料館・教授)

マッカーサーへの手紙に見る「振れ幅」

谷川 ご発表の先生方、長時間にわたり、ありがとうございます。手紙をめぐる諸問題についてさまざまな角度からお話をいただきました。ここから先は私が司会となり、皆様にディスカッションしていただきたいと思えます。申し訳ないことに時間があまりございませんので、かなり論点を絞らせていただいた形で進めたいと思えます。

私も含め、国文学のほうの三人がかなり低空飛行で話しましたので、大きな視点からおまとめくださった歴史の宮地先生、安田先生から伺っ

て、まとめに入りたいと思います。

安田先生にまずお聞きします。宮地先生から、手紙を介した人びとの情報のネットワークが明治維新の新聞・雑誌メディアの出現によって変質する、終焉を迎えて時代が変わるという話をさせていただきました。しかし、安田先生にご紹介いただいたマッカーサーへの手紙は、いわゆるメディアには一切かわからず、肉筆だけでマッカーサーに宛てて書いた生の手紙と考えるとよろしいでしょうか。

安田 私が今回ご紹介した手紙についてはそうです。戦後直後の場合には、手紙というのは総体としていろいろな機能を持っていたと思います。たとえば、出版の世界でもっとも原



初的なコミュニケーションとは何かと
考えてみれば、自分で焼け跡の中を
歩いて、目当ての人を訪ねていき、い
ろいろな打ち合わせをして、雑誌を
作って、できた雑誌は風呂敷で背負
つていまの新橋のキオスクのようなと
ころに持って行って売るといった形で
しよう。そういうものを原初的コミ
ュニケーションと表現するとすれば、
国敗れた挫折感の中で、マッカーサ
ーに宛てて、国民の個人個人が手紙
を一所懸命書くという行為はまさに
そうだったと思います。

先ほど言わなかったことを少し付
け加えますと、今日、私はさまざま
なタイプの、さまざまな内容の手紙
について述べましたが、これらはマ
ッカーサー宛ての手紙でなかったら、
あるいは目の見なかったものでは
ないかとも思うのです。たとえば普
通のジャーナリズムに投書した場合、
原爆の問題についての批判などはシ
ャットアウトされていたでしょう。変
な言い方ですが、マッカーサーに対
する直接の手紙であったがゆえに後
世に残り、当時の人びとのリアルな
思いをうかがい知ることができる貴
重な資料になったような気がします。
そのような意味では、マッカーサ

ー宛ての手紙には、かなり特殊な世
界が構成されているように思います。

手紙を見ると、心情の振れ幅もそ
うだし、論理の振れ幅もそうだし、
世界全体をどういうイメージでつ
かまえていくかということに関して
も、一つ一つに相当な差異があります。
まともな意見もあるけれども、めち
やめちな意見もいっぱいあります。
そのように端から端まで思い切り振
りきれた幅のようなものが、あの時
代の真実ではないだろうか。一言では
説明しつくせない複雑な戦後の真実
のようなものが、あれらの手紙の中
には見える気がしています。

近代の始まりの 「二つの段階」

谷川 では、宮地先生に伺います。
私の理解が浅薄なこともありですが、
宮地先生のお考えでは、手紙が持つ
ていた公的な側面といえますか、そ
ういうものが新聞・雑誌に取って代
わられ、公共空間の中の言論のや
り取りは活字メディアに担われてい
くことになったということですか。

かなり乱暴に、いまの安田先生の
お話をつなげますと、戦後、もう一

回それが方向を変えるか変質して、活字に載らないような私的な形で——マツカーサー宛てですから完全に私的な手紙ではないと思います——活字を媒介にせずに流通することになったと言えようかと思えます。そのような事態に関して宮地先生はどうお考えでしょうか。

宮地 私はあまり戦後までの見通しがありませんが、日本の近代を考える場合にいちばん大事なことは、ペリー来航の情報を十日ぐらいで日本全国が知ってしまう、しかも幕府は広報も何も一切出していません。これは手紙しかありません。そういう日本の社会ということを前提として幕末から維新を考えないと、本当のことは見えないのではないかというのが私の最近のモチーフです。

しかも、情報というものは、一方的に渡しても一回限りです。相手が返してこなければこちらは情報を出しません。情報の蓄積というのは、各地に情報の発信主体があるということです。受容主体ではありません。この発信主体が各地にできて、そこで風説留という膨大な情報の記録が各地に残っていくこと、それをどう考えたらいいか。これは経済史で

も問題にしていない、政治史でも問題にしません。けれども、私は社会史としていちばん面白く大事な状況が、ペリー来航から始まったと思っています。これが第一段階です。明治元年というのは、日本近代の最初ではなく、第二段階です。第二段階に入って失ったもの、および獲得したものをきちんと見極めないと、明治維新は議論できないという形で、いまは考えています。

文学史の方向で言うと、二葉亭四迷などが言文一致で最初に出てきます。しかも、主人公ははじめから政治に関心を持たないか、あるいは除外された余計者の形で出てくるのは日本の特徴だと私は思っているのです。イギリスなり、フランスにはありません。しかし、日本近代では政治批判と文学、あるいは社会的広がりを持った個人と集団の文学的形象の可能性がなかったのかどうか、そのあたりをもう少しペリー来航以降のさまざまな文芸作品から詰めていかないと、歴史の人間が考えている近代と文学の人間が考えている近代がどうもずれてしまいます。

人間文化研究機構では、うまい議論の仕方がまだできていませんが、

これはもう少し本気で論争するつもりでやると、石井先生も喜ぶのではないかと思っていますが、やるのは難しいですね。以上です。

谷川 歴史と文学の認識がずれているということでした。おっしゃるとおり、文学のほうはけっこう低空飛行してしまい、あまり大局的な視点についてはお話しできなかったかもしれません。

文学の世界でも、十九世紀から始まる一連の変化のプロセスがあり、教育の普及などの影響を受けながら二十世紀にかけて続いていくのだろうと思うのですが、その辺についてキャンベル先生はいかがでしょうか。

「黒船」から様変わりした文字の世界

キャンベル いまの質問に直球でお答えすることにはならないかもしれませんが、私の意見を言います。宮地先生がおっしゃったこと、嘉永六年にペリーが来て、そこから日本の近代が起動する。そして明治維新から第二段階が始まるということは、たぶん文学の世界では論理的、体系的に説かれてこなかった。まだ整理さ

れていないと思います。

ただ、宮地先生のおっしゃることは、文学の研究者として私には十分に共感できますし、実感もできます。ペリーが来航した前後、とくに嘉永ごろから、文字として書かれたもの、たとえば文学の内容、形態や、文字のイメージというものが変わっていくように思います。

たとえば高山彦九郎や蒲生君平など、すでに亡くなっている人たちが志士、尊皇家としてまつりあげられ、彼らが書いたものが一枚刷りになって一気に広がったりします。文久、元治あたりには、先生も今日話してくださいましたが、安政の大獄で倒れた人たちが下獄したときの遺書などが模写されたり、模刻されたりして世に出てくる。そんなことを、お話を伺いながら思い出しました。

明治二年に出版された『英列遺墨』という立派な本があります。幕末の一八五〇～六〇年代に起こったいろいろな事件のときに、幕府の獄吏によって処刑されたり、あるいは道半ばで逝った人たちの遺墨集です。錦織の布張りのたいへん見事な表紙がついています。このようなものが明治二年の戊辰戦争の余燼よじんまだ冷めやら

ぬときに作られたのです。情報としてももちろん非常に面白いのですが、それこそ人びとが最後の血の一滴を込めて残したような切実な思いを感じます。

ちなみに、ときどき幕末の「風説留」などの中にも、こういったものの写しとか、獄中で書いた辞世の句といったものを見ることがあります。手紙とも共通しますが、ともあれ、その人が最後にこの世に残した思いが形として世に流布していくような動きは、ちょうど幕末のころから非常に広がっていくような気がします。

手紙には「真実」が込められる

十川 私は何十年前前に島崎藤村のことをかなり調べたことがあります。藤村の故郷は馬籠で、中山道の宿場町です。『夜明け前』では、街道からもたらされたさまざまな情報がかなり重要な資料になっています。私は風説留という資料はたいへん面白いと思うのですが、あれには本当のことが書いてあるのでしょうか。

宮地 あやしいのも多いです。彼らはその後入手する新情報で情報誤差



を縮小していく手段をとっています。

十川 そうですか。藤村が『夜明け前』で使ったのは、隣の造り酒屋の大黒屋の『大黒屋日記』というたいへん精密な日記です。街道を誰が通ったとか、誰が何したとか、らくだが通ったとか、象が通ったとか、柿が幾つ落ちたとか、そんなことまで全部書いてあります。いまでも馬籠には民俗資料館なるものはいくつかありますが、藤村は公文書とともにこれらの資料を参考にしています。小諸のほうへ行くと、赤報隊せきほうたいの話が文書に残っていたりします。そういう

形で、風評も含めて書き留められた資料が『夜明け前』にはたくさん使われています。

確かに江戸時代は情報伝達の手段が少なかったので、手紙、書簡はずいぶん重要であったと思います。手紙の役割というのは思う以上にかなりの情報伝達を担っていたと思います。明治時代になれば確かに雑誌も新聞も出ますが、これらのメディアはまずいことを書くことが出来ず、意図的に本当のことを言えないという不自由さもあったと思います。



いまキャンベルさんと読んで『絵入自由新聞』も、ときどき停止になっています。たとえば「ノルマントン号事件」といって、和歌山の串本のあたりで難破したイギリス人のドレイクという船長が日本人乗客を置き去りにした事件があったのですが、それを戯作にして連載していたら、突然新聞が発行停止になってしまいました。そのように、新聞が停止させられて書けなくなったような場合、内密のことが個人的な文書で残されたり、誰かへの手紙に残されたりします。幕末から明治のえらい人たちの何とか文書というものは、その類のものがけっこう含まれているように思います。

私が読んだものでは、池辺三山の手紙というのが相当あります。池辺三山が新聞に書けなかったことを内々に書き残したものです。公のメディアでは、権力関係から停止を食わないように書くテクニックが発達しますから、どうしても書けなかったことを日記や手紙で密かに書くという行為につながるのです。

いま、近代文学といえは、言文一致体を作ったとして二葉亭四迷の名前などがすぐ挙がります。しかし、

あれは半分明治で、じつは江戸的な要素が非常に強いと思います。ですから、それより以前の明治十年代の書簡とか、新聞・雑誌、あるいは中国から入ってきた文献とか、そうした文章も含めて総合的に見回していかないと、近代文学がどうのこうのということには簡単に言えないように思います。私もこの年になって、改めてこれから勉強しようと思っています。

谷川 ありがとうございます。「手紙学」という分野はまだありませんし、何とか手紙を研究する領域の輪郭がつかめたらという気持ちで今日は臨んでいます。どうやら少し、きつかけはできたでしょうか。時代、あるいは海外の状況等を含めて、より有効な視点を模索しながら、今後進んでまいりたいと思います。

変わりゆく 人間関係の価値観

谷川 最後に司会者の特権で、一つだけお聞きして締めくくりとさせていただきます。

私も現首相と同じ年で戦後生まれなので、今日お話を伺っていても、占

領時代の様相というものがなかなか浮かんできませんでした。ですから、マッカーサーに手紙を書いた女性はかなりいたという事実には、けっこう意外な感を持ちました。そこで、候文の型にこだわりを持っておられる十川先生に、マッカーサーに候文で女性が手紙を書いたというのは、どのような文化的な意味と云いますか、営みだったのかということをお聞きしたいと思います。

十川 あの手紙を拝見して思ったのは、候文の中でも女性の型ではなく、非常に男性的な型だということです。

いわゆるまわりくどい女性の手紙ではありません。ですから、よほど真剣に書いたのだと思います。アメリカに留学させるというのでしよう、幾つくらいなのでしょう、あの方は。よくわかりませんが、勉強しにいくと云うのですから、二十代か三十代でしようか。彼女はマッカーサーに最大の敬意を払って書こうとしたときに、候文を思い出したのだらうと思えます。実物を見ていませんが、相当な教養があった人なのか、あるいは代筆なのか、どちらにしても興味深い手紙です。

手紙は人間関係というものに対する価値観とかかわっていますので、繰り返すようですが、親友や家族だけでなく目上の人にも言文一致で書くということは、敬意のようなもの、あるいは型のようなものが稀薄になり、その代わりに「個人」が表面化する時代の空気を反映しているのだと思います。

谷川 では、以上で終わりたいと思います。先生方、長時間まことにありがとうございました。

閉会のあいさつ

五味文彦

(人間文化研究機構理事)

パネリストの先生方、会場においでくださった聴衆の方々、お疲れさまでした。心よりお礼申し上げます。本日は「手紙」というテーマについて非常に幅広く、さまざまな視点から意見が出ました。これをきっかけに、手紙という新しい分野に注目が集まるかもしれません。

議論に花が咲いたことで今日のシンポジウムは予定を大幅にオーバーし、ほぼ四時間半となりました。人間文化

研究機構と云いますと、何か冷たい組織のようにお思いかもかもしれませんが、ご覧のとおり非常に熱い組織です。

当機構ではこのようなシンポジウムを定期的に行っております。先ほど話題に出た「ネットの世界」ではありませんが、ホームページも開設しており、シンポジウムのご案内もしていますので、ぜひご覧になって、またご応募願えればと思います。今後とも人間文化研究機構をよろしく願いたします。



十川信介 (とがわ・しんすけ)

学習院大学文学部日本語日本文学科・教授、日本近代文学館専務理事。京都大学大学院博士課程修了。日本近代文学専攻。最近は、文学者の日記・書簡・原稿、明治の新聞を読み、それを通じて日本語と日本文学の「近代化」を考えることが多い。著書『二葉亭四迷論』『島崎藤村』『「ドラマ」・「他界」』『明治文学・ことばの位相』など。編集『新日本古典文学大系 明治編』『明治文学回想集』『二葉亭四迷全集』『斎藤緑雨全集』『如是閑文芸選集』『紅葉全集』など。



谷川恵一 (たにかわ・けいいち)

国文学研究資料館複合領域研究系・教授、総合研究大学院大学併任教授。京都大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。高知大学人文学部教員を経て現職。近代日本文学のうち、明治前期の文学を中心に研究し、全国の図書館等に残された文献の調査を行っている。著書『言葉のゆくえ—明治20年代の文学』。他に『通俗伊蘇普物語』『随筆明治文学』の解説、『教科書・啓蒙文集』（新日本古典文学大系 明治編）の注釈など。また、国文学研究資料館より刊行中のリプリント日本近代文学シリーズの企画・編集に当たっている。



ロバート・キャンベル

東京大学大学院総合文化研究科・助教授。ニューヨーク市生まれ。ハーバード大学大学院東アジア言語文化学科修士課程修了。文学博士（ハーバード大学）。専攻は近世後期から明治の日本文学。著書『明治漢文小説集』（共著）など。



宮地正人 (みやち・まさと)

東京大学大学院・名誉教授、国立歴史民俗博物館・名誉教授。東京大学大学院国史学博士課程を中退、国史学助働勤務後、東大史料編纂所に入所。同所長を勤めた後、2001年から05年まで国立歴史民俗博物館長。著書『日露戦後政治史の研究』『天皇制の政治史的研究』『国際政治下の近代日本』『幕末維新期の文化と情報』『幕末維新期の社会的政治史研究』『歴史のなかの新選組』など。



安田常雄 (やすだ・つねお)

国立歴史民俗博物館歴史研究系・教授、総合研究大学院大学日本歴史研究専攻併任教授。東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得。電気通信大学教授などを経て現職。専門は近現代日本の社会思想史、戦後民衆史。民衆の生活と社会意識を通して、日本近現代史の構造を考える。著書『日本ファシズムと民衆運動』『暮らしの社会思想』『戦後体験の発掘』（共編）、『戦後歴史学再考』（共著）、『戦後経験を生きる』（共編）、『講座日本史10、戦後日本論』（編著）など。

大学共同利用機関法人

人間文化 vol.5

特集

人間文化研究機構 第5回公開講演会・シンポジウム

人は、どんな手紙を書いたか
——近代日本とコミュニケーション

2007(平成19)年1月30日発行

編集・発行人 五味文彦
発行 大学共同利用機関法人
人間文化研究機構
〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-13
秀和神谷ビル2階
TEL:03-6402-9200(代)
<http://www.nihu.jp/>

編集 山内編集事務所

デザイン 緒方裕子

印刷 協和リソアート株式会社

編集後記

本誌は、2006年9月30日、東京・千代田区の一橋記念講堂で開催された第5回公開講演会・シンポジウム「人は、どんな手紙を書いたか」において、各パネラーがふるった熱弁の再生である。

それぞれ手紙に対する切り口は多角的であり、十川信介氏の候文と言文一致体を対比させた手紙の文体論、谷川恵一氏の『手紙雑誌』その他を通じての趣味的な手紙文化論の流行、キャンベル氏の江戸時代の漢文体書簡から近代文学への照射、宮地正人氏の平田国学者の書簡資料の整理と考察の視点、安田常雄氏の戦後の日本人がマッカーサーへ書いた膨大な資料の分析など、みな読む者を惹きつけ、圧倒するだけの言説が並んでいる。

手紙が、人間の根元的な営為であるコミュニケーションとしての性格を基本としていることはいうまでもないが、同時に社会の在り方と不可分に絡み合いながら文化としての内実を有しており、今回は、そのさまざまな実相を析出することに力点があった。それによって、手紙がこれだけの文化的な広がりを持ち、さまざまな問題に繋がっていく素材であることを改めて認識できたと思う。

私は、単純にビジュアルなところから入っていく傾向があるので、シンポジウム当日は、近代文学館所蔵の樋口一葉の葉書の映像に見とれ、かつての許嫁渋谷三郎が一葉からもらった年賀状に感激したという話を思い合わせるなど、勝手な想像をめぐらせることによって、手紙のカリグラフィーへの関心は、そちらで充足することができた。

人間文化研究機構

第5回公開講演会・シンポジウム実行委員長

鈴木淳(国文学研究資料館・副館長)

表紙写真

杉浦梅譚宛ての何禮之の手紙(詩箋)(国文学研究資料館蔵)

資料提供・協力者

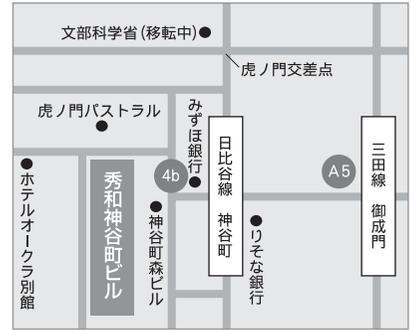
国立歴史民俗博物館／国文学研究資料館／日本近代文学館／山梨大学附属図書館(順不同・敬称略)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

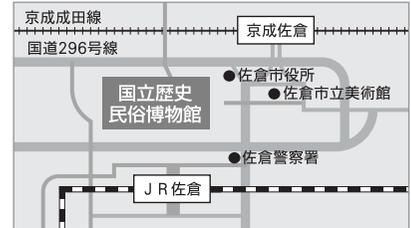
〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-13 秀和神谷町ビル2階
TEL:03-6402-9200 (代表)
<http://www.nihu.jp/>

(最寄り駅)
地下鉄日比谷線神谷町駅 (出口4b徒歩約2分)
地下鉄三田線御成門駅 (出口A5徒歩約10分)



国立歴史民俗博物館

〒285-8502
千葉県佐倉市城内町117
TEL:043-486-0123 (代表)
<http://www.rekihaku.ac.jp/>



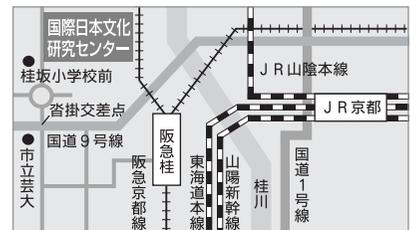
国文学研究資料館

〒142-8585
東京都品川区豊町1-16-10
TEL:03-3785-7131 (代表)
<http://www.nijl.ac.jp/>



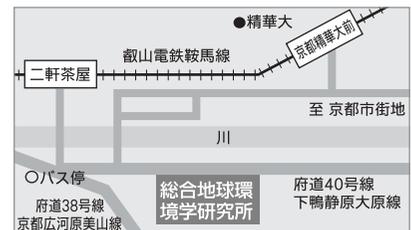
国際日本文化研究センター

〒610-1192
京都市西京区御陵大枝山町3-2
TEL:075-335-2222 (代表)
<http://www.nichibun.ac.jp/>



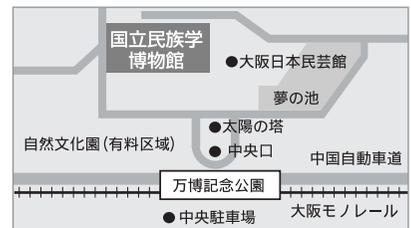
総合地球環境学研究所

〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457-4
TEL:075-707-2100 (代表)
<http://www.chikyu.ac.jp/>



国立民族学博物館

〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10-1 (万博記念公園内)
TEL:06-6876-2151 (代表)
<http://www.minpaku.ac.jp/>





大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

国立歴史民俗博物館 国文学研究資料館 国際日本文化研究センター 総合地球環境学研究所 国立民族学博物館



古紙配合率100%再生紙を使用しています

ISBN 4-903211-04-5